

常に強がつて居る宗兵衛が、キヤツと云つて仆れ助けてくれと弱い音を擧げたに吃驚し、全く隣家の宗兵衛は殺られて了つたことと思ひ、命辛々六兵衛は我が家へ轉げこみます、また宗兵衛も夢中で我が家か他人の家か辨へもなく這ひこみ、徐々と我れと我が頭を撫で、見ますると、首をチョン斬られたと思つたに、チャンと附いて居ますので不思議な氣がする、首をくるく／＼回轉やうにして見るが、大丈夫でございませうから宗兵衛は勇氣が出て、内から確り戸を押へて居たと申します、是れは臆病風に吹き込まれた宗兵衛ばかりでない、歴々がこんな子供の喧嘩染た滑稽を演じたやうで、彼等の口上書の中にも「先に進み候者一人槍にて突れ申候故、先小屋に入申候得ば、外より戸を押へ出し不申候」とあります、そして此の外より戸を押へ出し申さずと云ふことが、頗る面白い通辭で、我れと我が恐しさの餘り、戸を押へてゐたのを白して居るやうなもので、問ふに落ちず語るに落るとか云ふのは此處でございませう

か、此の手の組も裏門を破壊して邸内へ亂れ入りますと、直ぐ手配は整然として、第二班の大石主税等の側面牽制隊は、ワット叫んで進みましたから、吉良の長屋に住つてゐる連中の寢惚眼で、火事だと思つて飛出す頃は最う手が十分に廻つて居ました。

七一 壁を脱ける曲藝

晝を救く曉天の月は、漸く西の端に傾き、明の明星は光白く輝き、隙間もる風の身を切るやうに、冷たさが染々感じられます時、裏門を打破る凄き響きに驚いて、目を覺しました表門番の足輕中里仁右衛門は、慌て、飛び起きますと、其の儘長屋から飛んで出る、同じ表門の番人でございませう是も足輕の丸山清左衛門、慌てくさつて飛び出る出會頭に、バツタリ突き當つた鉢合せに、又吃驚仰天いたし、
「ヤア何奴だ——」

と仁右衛門が嗚鳴つて腰の一刀に手を掛け身構へますれば、清左衛門もまた一步退つて刀の柄を確と握り。

「貴様こそ何奴、無禮をすると手は見せぬぞ……」

と威張ながら、雙方月に透かして見ると、隣合つて居る朋輩、而も同じ表門に勤める仲間同士でございますから、

「ヤア貴様は仁右衛門だな。」

「さう云ふ其方は清左であつたか。」

「あゝ、周章ちやア怪我のもとちや、此様騒ぎの時は氣を落附ねえ……」

「已らア些とも慌てやしねえ……清左、貴様が飛出して来ていやと云ふほど打附かり

あがるから、咎めて見度もならアな。」

と負惜みは云ひますものゝ、俄の騒ぎが何であるか知れませんが、火事だ〜といふ喚

き叫ぶ聲はいたしても火の手も見えないので、仁右衛門はキヨロ〜する。

「已らより仁右衛門、お前の方が餘ッ程慌ててるぞ、……火事だ……火事だツてが火の手も見えねえ、何處だらうなア。」

と清左衛門もキヨロ〜と四邊を見まはします中、表門の方に當つて哄然喊聲があがると、之れに應じて裏門の方でも哄然あける喊聲は、天地に震動いたし幾百人かの人數で一時に押寄せたかと思はれますので、兩人は驚ろきうろたへまして、

「清左、是りや容易の事ぢやねえ、あの聲は……」

「うむ……如何にも、ことに寄つたら赤穂の奴等が……大將をな……」

「違えねえ……何にしても已らは表の御門番だ、出懸すばなるめい。」

と兩人は表門の方へ一散に駆け附けます、この時は最東組の面々は活動を開始いたし、表門近くには大石内藏助、間瀬久太夫の二人がゐて、原惣右衛門は玄關近くに

進み指揮をして居る、遊軍の堀部彌兵衛等の人々は、小門の方を警戒して居りましたから、仁右衛門、清左衛門の兩人は支へる人なく御門近くまで駆けて参りました。餘りの騒ぎに氣は轉倒して居る、只一心に御門へとばかり心掛けて来たので、足下などに注意はいたしませんから、一步先に進みました仁右衛門は、何物にか躓きバツタリ倒れます、後より駆けて来る清左衛門も、倒れた仁右衛門の上へ躓き轉び、ハツと思つて見ると先に躓いたは死骸で、四邊は雪を血汐に染なして一面の唐紅でございませうから、兩人とも起き上るとその儘、またベツタリ尻餅ついて腰が立たず、怖々這ひ寄つて見ると、今宵當番であつた、同僚の森半右衛門、最う息の根が止まつて殺されて居るに、ワット叫んだまゝ、ベタ／＼と我れから雪に身體を埋め、目ばかりバチクリして茫然と夢のやうな心地で、精神は喪失して了ひました、斬られたのでもなく氣絶したのでも無い、膽ツ玉潰した蟬脱の殻も、寒風に吹晒された雪埋では、身體も

冷切つて血も凍つて了ふ兩人、丁度雪を掻き除けて積んだ片蔭になるので、討入の勇士に見出されなかつたのか、縦や認めましても腰拔を斬るは詮なし、逃る者は逐ふに及ばず、双向ふものは容赦するな、拵を守つて、見ても見ぬ振に過ごしたか、危い生命を拾ひモチ／＼遣つて居りますうちに、清左衛門は全く正氣になりますと、是りや斯うして居られる場合でない、赤穂浪士に取つては君の仇と討入つて、御隠居上野様に怨みを報いんと致しもしやうが、自分に取つては假令善にもあれ悪にもあれ、上野様は大切な御主君である、その御主君の危急の瀬戸際を斯うして居るは、恥知らず此の騒ぎでは上杉様へ注進する者のあるやなしやも知れず、さうぢや何も踏み止まり白刃の中を潜りまはつて、怪我するばかりが忠でもない義でもない、よし我れは一番抜けがけの功名手柄せん、是危きを避ける安全の策であると考へつきましたは、此奴中中隅には置けぬ男でございます、清左衛門斯う腹がきまると、急に寒くなつて身體が

ソク／＼するを、身慄ひいたしながら、ヤツと氣張て腰を切らうとしますが、身體が雪に凍付いて了ひましたか、容易に起きることが出来ませんから、漸く這ふ様にして積んである雪の此方より表門の方を透かし見ますと、一三人白刃引提げ油断なく四邊を警戒して居る體でございます、是れでは到底も表門から抜け出すことは出来ない、ア、困つたものだ、折角の名案も空しくなるかと歎息して居りますると、彼方此方よりビュー／＼と呼子の笛が鳴ると、合圖と見えて門内を守つて居ました連中も、追々に笛の音色を慕ふてスタ／＼スタ／＼と行つて了ひ、東雲の空は白み渡つて、夜は正にほのぼのと明方近く成りましたので、青左衛門はいよ／＼心丈夫に相成り、這ひ出して參つても誰咎める者もないを幸ひ、勝手知つたる屋敷内でございますから、漸う往來へ抜け出しホツと息をつき、日比谷に住はれます上杉の邸へ御注進／＼で驅付けました、同僚の死骸を見て腰をぬかす程の臆病者には出来過ぎた殊勝な働きでございます

した。

これに反して後世まで、臆病者よ意氣地なしよと笑はれ草になりましたは、百五十石取の家老齋藤宮内と、百石取の同く家老左右田孫兵衛でございます、百五十石取といへば、吉良家の家臣中高頭でもあり、家老でもある齋藤宮内などは、分別あるべき筈、また主家の大切と見て取たら粉骨碎身の働きをいたして、日頃の恩顧に報ふべきが當然でございますのに、此の夜の騒ぎを聞きますと直ぐ縮みあがつて、戸外へ出る勇氣もなく、家の中に小さくなつて屈んで居りましたが、夫れでも若しや押込で來はせぬかと、生てる心地はしません、常に御家老様の齋藤様のと尊敬受ける身が、この有様は何といつて好いでせうか、呆れて物が言へない始末、斯うして居てもまだ安心が出来ないので、何うか逃出さうといろ／＼工夫を凝しましたが、なか／＼好い智恵ができません、戸外では喚き狂ふ聲がします、お邸の内でもありませんか、幽に女の泣叫

ぶ悲鳴が聞える、白刃で斬結ぶ凄まじい音が、ガチリ／＼と腸へ刺すやうに響きます。さア斯うなると、臆病者の癖として、最う起つても居てもデットして居られませんので、困しい時の何とやら申して、漸うない智恵を搾り出し、御家老様ともあらうものが何うでせう、身を護るための刀は壁を切り破る道具、一生懸命大潜りほどの穴をあけ、ソツト這出して往來をキヨロリ／＼と見廻しましたが、幸ひ人の來る様子もないに齋藤宮内は、ヤツと胸撫おろし、先づ二つない生命を取り留めたと、莞爾すに足元へドタリと落ちた壁土、膽を潰して尻餅ドサリとつく鼻の先、同じく壁を切破つた穴からニューと首が出たに、宮内はまた吃驚して逃げんとするを、這ひ出して來た同じ家老の左右田孫兵衛、

「齋藤氏ではおぢやらぬか……」

「さう言はるゝは左右田氏、貴殿も壁抜の曲でござるか……」

「イヤ面目次第もないこの始末……」
と左右田孫兵衛が悄然ますを、宮内は耳元に差寄つて、
「それは相身互でおぢやる……拙者も實はな……ハ、ハ、ハ、ハ、」
「これは不思議、言ひ合したやうに……貴殿は是れより何れへ……」
「然ればでおぢやる、先酒屋三右衛門方へ落ち延びた上で……斯様の時は相談對手のあるが互の心丈夫、同行召されては如何でおぢやるな。」
「それは千萬辱ない、いざ御案内下されい。」
と兩家老は恥し氣もなく、向町なる酒屋の軒へ立つと、内では向屋敷の吉良家でゴツタスツタ遣つてる騒ぎに目を覺まし、表の潜戸が少し開きかけあるは天の與へと、宮内はガラリと開けて飛び込みさま、
「三右衛ども、拙者共兩人暫く頼む。」

と云ふ顔は、紛れもない吉良家の家老が二人揃ふて来たに吃驚し、まだ何の挨拶もせぬうちに、「左右田氏、表の戸締を堅固に……」

「承知いたしました。」

と孫兵衛はカチリと掛金かけて、上り框へドツサリ腰を下し、兩家老は互に顔を見合せてホツト吐く溜息、虹のやうに火影に映りました。

七二 雪中の腥風血雨

側面からの牽制運動は、最も機敏に最も巧妙に行はれましたので、長屋に住居てゐる吉良の人々は、周章狼狽の餘り、臆病武士の名を後世まで傳へる不甲斐なき惘て方をいたしました中には、左様臆病者ばかりも居りません、天晴の働きをいたして、主君の難に殉じながら、其の立場の悪かつた爲めに可惜勇士も、吉良家の武士といへば一

概に弱蟲のやうに思はしめ、臆病者の標本のやうに言囃されて居りますは残念な譯で……是等の人々は地下に、快く永眠することが出来すまい、第二班に属しまする牽制隊は三手に分れ、「り」組は大石主税、潮田又之丞、不破數右衛門、木村岡右衛門の四人、「か」組は中村勘助、奥田貞右衛門、間瀬孫九郎の三人、「よ」組は千馬三郎兵衛、茅野和助、間新六、前原伊助の四人、都合十一人でございますが、「り」組の一人不破數右衛門は、他の人々の同盟とは些と毛色の變つた處があつて、當夜拔群の働きをいたしたも、素より据物斬の名人と云はれた手腕の覺えに、最後の花を咲かせましたのでございませう、全體この不破數右衛門といふ人は、岡野治太夫の子であつて不破家の養子、浅野家に、二百石を食み馬廻役を勤め、濱邊奉行を兼て居りました、數右衛門は元來豪放不羈の性質で、武勇も人に勝れた豪傑でございませうから、小節なコセコセした事には係はらない、大度量な眞直な氣象であつて、常に佞人の大野九郎兵

衛とは犬と猿の中、近頃になつては圭角が取れたものであるか、將た雙方とも意氣地が無くなつたのでせうか、犬の背中に猿を乗せて引張つて歩くを見掛けますけれど、元祿時代の犬と猿は、中々そんな融通の利くもので無かつたと見えて、犬と猿と云へば其名を言はなくとも、大野九郎兵衛と不破數右衛門と符牒のやうになつて居た程で……此の不和が乗ぜられる一の原因とも成り、日頃の豪放から九郎兵衛の讒言で、數右衛門は百日の閉門、是れは君命でございますから争ふことが出来ず、謹慎をいたして百日経て出勤すると、根が正直一途の數右衛門は、此度の閉門に就て不平滿々でございませうから、黙つて居るとが出来ません、素より身に犯した罪がないと信じて居ることで、遠慮なく上役に向つて抗議を試みますると、ます／＼對手は機會を得て輪に輪を掛けて、讒言を構へましたから、性質短慮の疇癖家、内匠頭は主命に反抗する不埒者とあつて、永のお暇と成つたのは、内匠頭が疇癖玉を破裂させて、上野介を斬

り付ける五六年前でございました、其の後主家の災厄を開きて獨り胸を痛めて居りますと、一日磯貝十郎左衛門に邂逅て往事を追憶いたし、亡國の感慨に堪へません處から、復讐の擧あるを聴きますると、急に山科に大石内藏助を尋ね、心底をさらけ出し、誠忠無二の決心を示したので、内藏助の計ひにて、冷光院殿の墓前に於て歸參を許され、此度の同盟に加名いたした譯……斯かることから同盟に加はつた數右衛門、一層感奮して手腕の續かん限り働らき、亡君尊靈が修羅の妄執を慰さめ奉らんと、當日の至るを待ち兼ねて居つたのでございます、處で極月は十四日の討入、自分は西組にて裏門を打破り邸内へ入ると、牽制隊十一人の一人で「り」組に編制され、大石主税、潮田又之丞、木村岡右衛門と一手に成つて、ワツと喚き叫んで突撃いたし、先づ不破數右衛門の銳刀に血を染めて、西組の血祭になつたのは大河内六郎左衛門でございました、敵對する奴原は容赦なく斬つて棄てよ、逃れる弱蟲は逐ふな、女小供に怪我さ

すゝとは當夜の掟、牽制隊の趣旨は長屋より飛び出す者を御殿の内へ入れず、再び長屋へ追ひ込みて玄關より斬つて入る同盟の勇士をして、活動を自由にさせるが目的でございませうから、東組にても西組にても第二班に属しまする連中は、火事よ〜と囀鳴りながら、一面は長屋のものを誘ひ出して荒膽挫ぐ結構で……飛んで出るやエイと煌く刃の雷光、ビューと飛び来る矢の唸り、或は三十人組は西へ廻れ、五十人組は東へ進めとの虚勢に、數百人黨を組み力を合せて押寄せた者の如くに装ひましたので、一旦長屋を飛び出した者も吃驚いたし、常に心得のある吉良家の侍は、先頃の勢ひに氣を吞まれて了ひまするが多く、物の役に立つべきものも狼狽の體で、示威運動で脅迫てかゝる奇策が功を奏し、大抵は夕チ〜と氣おくれがして勇氣も沮喪しました。南側の長屋で取ツ付に住つて居ましたのは、徒士頭であつて中小姓を兼ねる杉山三左衛門とて、廿五歳の血氣な壯者でございませう、裏門とは多くは離れて居ないところ、

木槌で門を叩き毀はす怖しい音に目を覺し、ハテ怪しからぬ物音と寢床を起き上ると同時に、火事といふ喚き聲、それに續いて哄然あける喊聲に驚き騒ぎ、寢衣を着替る間などは到底もありませぬから、其の儘袴だけは急いで穿くと、突然枕元に置いた一刀引提げ、戸外へ飛び出して凍れる雪を素靴に踏み、一散走りに驅けて來ました、此の時不破數右衛門の一手は、既に勢ひ込んで亂れ入り、裏門より南へ西側の長屋の四軒目まで進み寄るや、雪を蹴散らして驅けて來る一人の壯者がございませうので、數右衛門は眞先に仁王立となり、

「待て！」

と一喝いたしました、此の驅け附け來たる男は杉山三左衛門で、今隠居所の急を察して、奉公振を見せるは此様時と、内玄關より入る覺悟で、息をも繼がず眞一文字に來るを塞がれ、危く數右衛門に衝當らんとしますを、其處は惘て、居ても侍、一步退るや

直ぐ刀の柄に手を掛けて身を構へ、
「待てとは奇怪なり……其方こそ何者！」
と竹篋返しに反問するさま、多少手耐へのありさうな舉動でありますから、數右衛門は落付拂ひ、

「さうさ我れこそは赤穂の遺臣、上野殿のお首級貰ひ受けに参つておちやるわ。」
「風聞にあつた赤穂の瘦浪人ども……推参なり、拙者が一刀受けて見よ」
と云ふより早く抜き打ちに、胴を斬らんとした、數右衛門も猶豫なく懸合せて二三合斬り結んだ、三左衛門いかに焦慮ばとて、据物斬の名人と許される筋鐵の入つた手腕、同士中でも屈強の剛の者たる數右衛門の鋭き鋒に敵すべき、三右衛門の斬り込んで来る太刀をヒラリ交せておき、コレ掛けた氣合諸共、右の肩先より斜に斬て下しましたが、三左衛門早くもガチリと受けたが、力が足りなかつた爲め肩口二三寸斬付け

られ、萎むところを二の太刀に横髪そぎ取られてバツタリ仆れ、雪を血汐に染めまして血腥さい風が面へフーと吹き付きました。

この隙に大石主税、潮田又之丞、木村岡右衛門は敵を追ひこみ又は追ひ散し、ズンズンと進みましたから、不破數右衛門も跡を追ふて進む、二番手である「か」組の中村勘助、奥田貞右衛門、間瀬孫九郎の三人は、裏門に沿ふ長屋七軒の者の飛出さんとするを防ぎながら、追々に進んで参るとき、丁度四軒目、不破數右衛門が今杉山三左衛門を斬り付した前へ來ますと、甲斐くしく四五人降積む雪を掻き除て、通路を開けた片蔭から、衆を力に不意に抜き連れて斬てかゝる、えッ小癩な支へ立て、成らば對手にして見よと、當年二十有五歳で血氣壯んな奥田貞右衛門、眞先に一刀振被つて斬つて入る、續いて間瀬孫九郎、中村勘助何とて猶豫いたすべき、孫九郎は槍を抜いて突てかゝる、勘助は刀を揮つて打て掛る其勢の鋭きに、吉良家の處士が殊勝な振舞

も忽ち挫けて、早や逃腰になるとき、何處よりかヒューと放つた矢一筋、風を切つて後の戸口に發止と立ちましたので、彼等はいよく怖れ戦き、抵抗ふ勇氣もなく屋内に逃げこみました。

「やア卑怯なり、出會へ。」

と聲かけながら孫九郎は、槍の鐔にて、ドンと雨戸を敲きましたが、臆病風が立ては再び奮闘する氣力もなく、息を殺して又出るものもありませんので、斯かる敵は捨て置くとも、強ひて妨げする憂ひもあるまいと、「か」組の三人も月を明かりに、進撃いたします。

七三 月下に凄き紅雪

是れも南側二十八軒の長屋に住つて居りました清水團右衛門は、吉良家の分限帳に

載てゐる處では取次役で、十五兩五人扶持とありますから、相應の役向を勤めて分別盛りの四十男……邸内の騒がしきに夢を破り、瓦破と跳ね起きて耳を済しますると、彼方でも此方でも火事よくと叫ぶ聲がするかと思へば、悲鳴を擧げる物凄い叫びが、傷へ沁るやうに聞えます、火事にしては騒ぎが甚だしい、如何なる椿事が出来たか、斯くては御殿の中も心許ないと、一刀腰にぶち込むと其儘、雨戸開るも通しと戸外へ飛んで出ましたが、積つた雪を掻き分けて幾筋かの道を造り、十四日の月は稍や西に傾きて婆娑たる影清く輝き、夜肅々として殺氣邸内に充滿し、四邊の光景平常に變つて物凄い、長屋々々の出口を掻き除けた雪の細道を縫ひ、油断なく塀際まで忍び寄りました團右衛門は、尋常の入口より御殿に入らんとするには容易なことでない、非常の場合には非常の手段を廻らすとも、一刻も速く御兩所様の安否を知るが臣子の分である、遂巡して事を誤るに於いては、何の詮もないことだと、塀を飛越して内庭

より御隠居の居間へ至らんと、塀際に閑人がこさへた雪達磨、炭團を眼球に枝炭を結んだ口、邸の騒ぎも何處に風が吹くかで済まし顔で居ますは、是れ幸ひの足場とヒラリ飛び上り、忍び返しに手を掛け、力任せに毀さうとして居りますを、牽制隊の三番手に屬します千馬三郎兵衛が、遙かにこの體を認めバラ／＼と駈けて参り、突然エイと高く叫んで、斬て落さうと致しました、團右衛門も天晴心得のある武士でございませから、足を屈めヒラリと飛び下りさま、眞甲唐竹割と斬りつけて来る早速の早業に、三郎兵衛は血煙り立て倒れるかと思ひの外、身を沈めてチャリンと受け留めながら、さつと身を開くよと見えました、電光石火と斬り立て、来る鋭き勢ひに、團右衛門も二三合は受太刀となつたが、忽ち備へを立て直して猛虎の怒る如く、

「歴々のお邸へ推参して狼藉いたすとは、不埒千萬……容赦はせんぞ覺悟せよ。」と鋭く打ちこむ太刀風に、三郎兵衛もクワツと満面に朱を注ぎ、

「なにを小癩な……さア来い。」と奔龍天を衝くの勢ひを現はし、打てば開き開けば打ち、互に秘術を盡して争闘いたしました、雌雄を決せず、三郎兵衛は焦慮りエイと斬りこむをカチリと受け留め、引く刀に足を拂へば、團右衛門は飛び上つて空を打たせ、燕返しにすぐエイと頭上を目掛けて切つて下すを、ヒラリ身を交して横撲りの一本には、流石の強敵も、身體を捻り損じて薄傷を負ひましたので、いよ／＼奮激突貫する勇氣の猛烈なるには、流石の三郎兵衛も及びかねて二足三足タヂ／＼と後へ退る會機、掻き除けた雪の小山に躓き、バツタリ作るゝを、團右衛門は得たりと乗り掛つて、只だ一打ちと容赦なく打ち込み来る、此方も去るもの轉びながらに、身を滑らして巧に危難を逃れましたが、敵はこれに氣を得て激しく斬り込まれ、漸う惡戦に憊み居るを、同じ「よ」組の茅野和助が斯くと見るより宙を飛び、勢ひ猛烈に横合から斬り込んで來ました、團右衛門はまた

精銳の強敵を受けても、少しも萎む舉動なく、ますます奮闘血戦、勇氣更に衰ふる體もございませんで、三郎兵衛と和助を左右に引受け、踏込みく戦つて居りました、間新六、前原伊助の兩人は、長屋より出でんとする敵を追込みくして居りましたが、千馬三郎兵衛と茅野和助が、一人の敵に當つて奮闘するを見るより、バラくバラツと駆け寄り、新六聲をかけ、

「御兩所、我れ等新手が入り替り申さん。」

と言ふより早く、新進氣鋭の鋒銳を受けて見よやとばかり割つて入ります、伊助も何とて躊躇いたしませう、

「天晴手錬の敵と見受けたり、いざ拙者が替りて……」

と眞正面より打ち込んで来た團右衛門、如何に勇猛なればとて、四人を一手に引受けては堪まりません、衆寡敵せずで忽ち數ヶ所の傷を被むり、身は朱に染み氣力も次第

に衰へて、其場へ仰向さまに倒れて了ひました。

この時後にまた一人の敵が現はれ出で、背後より斬つてかゝるを、早くも氣の注ぎました前原伊助、咄嗟の間に身を捻り、

「卑怯者！」

と一喝して双を合す、敵は唯だ無二無三に斬り掛りまするさまは、殆んど死物狂ひの體、見れば最早中々の年配で、袴の股立高く取り、晒しの手拭にて鉢巻を確かりなし、吉良家にて相當の身分ある者と見え、不意に起つた椿事に悠々是れだけの支度して斬つて出るは、餘程沈着家と察せられました、此の男は何者であるかと申せば、上野介の用人で、祿高五十石を食みまする宮石所左衛門といふ、誰が極めた相場でございませうか、人間の定命五十の坂も既に越て居るので、前原伊助はそんな人とは素より知りませんが、敵に取つて不足のない、一筋縄では往きこうもない剛の者と見て取り、好

き敵こそ御参なれ、二十餘ヶ月の間怨みを呑み、腕を扼して待つたる今宵、縦や對手は鬼神たりとも、忠義の籠つた前原伊助宗房の一刀、成らば受けて見よやと、強敵と見て勇氣いよ／＼加はりまして、エイと烈しく打てかゝれば、敵も油断なく受け留める双と双、憂然として凄き音と共にパツト火花が散る、伊助が打ちこむ二の太刀に敵は飛び退きましたか間に合はず、太股を一刀ザクリと挽き傷うけ、ヨロ／＼と倒れかかるを危く踏み占めて、再び死物ぐるひの奮戦をいたしますが、思つた程の剛の者ではなくて、一創を負ふたばかりで、刀法の糸れを認めましたので、伊助は既に敵を威壓して踏込み／＼追ひ詰め、また數ヶ所の傷を負せましたから、ます／＼敵は勇氣も挫けダヂ／＼と後退りしますうち、掻き除けたる雪に躓き、足を滑らして挫と倒れましたに、強敵と思の外案外脆い此の始末で、伊助も張合脱のした様で、倒れる處を、「えい、支度ほどの奴でもない……」

と呟きながら、無益の殺生するでも無しと忝ち捨ておき、雪を掻き上げた小高き丘へ登りまして、月を明りに一手の所在を窺つて居りました。

南側二十八軒の長屋を警戒する任務を帯び、之れを片ツ端より物色して居りまする第二班の一手、大石主税、潮田又之丞、不破數右衛門、木村岡右衛門は、最う大抵出るほどの勇氣あるものは出で、此の騒ぎに腰を抜して、縮みあがつた奴原は、息を殺して小さく成つて了ひましたかして、一時はワツと騒ぎ立つた長屋の連中も寂寞となつたので、手持不沙汰で物足らぬ心地がいたし、室内に闖入した同志が羨ましく感じ居りましたが、勝手氣儘に斬つて入ることは出来ませんから、矢張彷徨として手腕のモチ／＼するを忍び、少しは手耐へある敵の出で来れと、巡廻して居りました、此の時まで寄手の舉動を窺つて居た、上野介の近習役では年頭たる五十五歳の加藤太左衛門、當夜は非番で長屋に下つて休息して居りますと俄かな大騒ぎ、火事よ／＼と

云ふ聲に吃驚して飛び出さうとすると、戸外は早やチャン／＼バラ／＼が始つて居る。是れは火事どころの騒ぎでない、寄手の三十人組五十人組と張る虚勢に脅迫され、さへは大層の人数である、今駆け出しては到底も御殿へ満足に入ることは六ヶ敷と、臆病風が身柱もとからゾクリ／＼と泌みては出る勇氣もないが、夫れでも機會があつたら飛び出さうと、戸外の模様を節穴より覗いては、ブル／＼と慄ひあがり、首を縮めて奥へ逃げ込みましたが、氣に成るので又戸の節穴から覗いて居ますうち、戸外は大分寂寥いたして小屋前に人影も見えないやうに成つた、さア最う徐々出懸ても大丈夫だ、御隠居様の所在さへ探し出して、怪我をさせぬほどに働けば役目は済むと、狡猾な考へを起して、怖かな吃驚で戸外へソツと出たが、幸ひに人影も見えませぬので、占た／＼と前後に注意しながら、漸く五六間拔足さし足、驚の聲でも踏みさうな舉動で來かゝる體を、目速く見附た潮田又之丞は、一手の跡を尾けて、不意にバツサリ遣

つて退る手段と勘違ひいたしましたので、熊と積雪の小高き蔭に身を潜めて待て居ります、加藤太左衛門は然る伏兵のあらうとは思ひも寄りません、素より今宵の寄手と奮闘して、主君に忠勤を揮でやうといふ心でもありませんから、用心に用心してピクピク物で來る小蔭より、潮田又之丞が前途にヌツト立塞がりました、斯うなつては太左衛門とてワツト逃出しもされず、一打ち二打ち白刃を交へましたが、忽ち擦過傷一ヶ所負されると、最うとても争ふ勇氣どころの騒ぎでなく、懸替のない膽ツ玉を潰して、奥の手の三十六計、スタ／＼と何處へか姿を隠して了ひます。

「ア、好年齢をしながら恥を知らぬ臆病者ばかりぢや。」

と又之丞は微笑みますると、冴え切る月を研ぐやうな風がサツト面を打ち、血腥い臭氣がブーンと立ちました。

七四 機智燈火を點す

月明に乘じまして、裏門を譯なく打ち破つた西組の一隊で、第一班の屋内へ突撃する一手は、豫て手筈の定まつて居ることとございませうから、霜に凍た雪を蹂躙きバラバラと、小玄關へ駈け付け、大力の三村次郎左衛門は、木槌を引提げたまふ、ツカ／＼と玄關の式臺に跳りあがるや、門を破つた餘勢尙去らず、玄關の戸を力に任せエイヤの聲諸共只一聲に破壊し呉れんと撲りまゐりたから、如何に堅牢に出来て居たとて、鐵骨鐵板を持って作つたものではなく、素よりの板戸、大力の次郎左衛門が二年越しに抱く遺恨の霽らしどきと、木槌を振つて撲り附けたのでございませうもの……忽ちガラガラガラツ、バリ／＼バリ／＼、ドタンバタンと激しい音がいたし、戸も障子も一所に眞中より捻折れて了ひ、玄關の戸締……第一の關門は只の一撃に脆く破れましたのを

見て、此の手の人々哄然喊聲をあげ、式臺の板踏み鳴らしながら、菅谷半之丞大音聲にて、

「赤穂の遺臣内匠頭の意志を繼ぎ、上野介殿の御首級所望の爲め推参せり、いざ見参見参！」

と叫びますれば、其の聲天地に響き、家鳴震動して邸中の夢を驚かしました。

玄關の戸障子を打ち壊して、此の手一組が闖入しました時、牽制隊の一部は既に火事よ火事よと喚き狂ふて、邸内の人々を脅かします内外相應じた手配は、東西兩組ともに遺憾なく實行された、玄關から亂れ入りました豪傑は、何れ劣らぬ一騎當千の英雄でございませうが、勝手は知らぬ室内ではある上に、眞闇黒で何處に敵の潜み居るやも知れませぬ、只だ僅に逃げ出す足音や、叫び騒ぐ聲を力に、暗中摸索の光景で、誠に不便極まり放心奥深く踏み込み兼ねました。この體を見て取りました磯貝十郎左

衛門は、年は漸く二十四歳、血氣壯んのものでございますが、性質機敏な男、何をす
るも、斯う眞闇黒では此の上もない不便である、是れでは味方の損、敵は案内知つた
る自分の屋敷内、逃げ匿れするには屈竟の都合であるから、何うかして燈火をつけて
働きの掛引を便にせされば、折角幾層の艱難を嘗め辛苦を忍びて、今夜優曇華の花咲
く機会を得ながらも、肝腎の上野介を逸し去りては甲斐なし、何奴なりと手捕にして、
蠟燭を点けるは味方が目前の便利、勇氣を加へる唯一の手段であらうと、早くも胸中
に描く劃策を實行せんものと、獨り大膽にも藥所と思ひまする邊へソリソリと遣つ
て参ると、一室に茫然有明の燈火が映して居りますから、十郎左衛門突然障子を蹴破
り、ヌツト中へ入ると、蒲團を頭から被つてブル／＼慄へて居るものがある。

「こりや起きろ！」

と蒲團の片隅に手を掛けてグイと引ツ割きました、最う五十餘りの爺さんで、素より

抵抗する氣力のある程の者ではなく、縦や兩刀を挿すまでが身分の軽い、取るに足ら
ない下賤の者らしく思ひましたから、

「其方は何者だ！」

と再び聲を掛けますと、急に勃然と起きて一目散に逃げ出さうと致しまするを、十郎
左衛門は猿臂を伸ばして、

「待て！」

と領首掴んで引据ますると、爺さん悲しい聲を立て、

「何うぞ御勘辨を……生命ばかりはお助け下さい……」

と領首掴まれて鷹に捕はるゝ小雀の身動きもならず、手を合して只管に哀を乞ふて居
りまするに、十郎左衛門も惻隱の心を生じました、素より殺す氣はありません。

「オイ、其方は何者だ！」

「ハイ、私は料理方の手傳ひで……當家の様子は一向に存じて居りません、何かお慈悲でお見逃しを……」

「ウム、料理方の手傳ひ……」

「ハイ左様で……決して偽りは申し上げません。」

とますます慄ひ戦き齒の根も合はず、ブルブル身を慄ひ恐怖に襲はれて居ります。

「拙者が吩咐を守つて用を便するに於いては生命は助けて遣はすが……若し知らぬな」と申すときは、是れこの一刀でな、よいか其方の首は飛んで了ふぞ！」

と脅迫しますと、聲を立てることも出来ず、いよ／＼慄ひあがつて僅に首肯き、只合掌して涙をホロリ／＼と溢して居りますから、十郎左衛門は人の生命は斯くまで惜まるものかと、可笑しさを耐へまして、

「如何にも生命は助けて遣らう……さア言へ、蠟燭の在所を……」

「ハイ……ハイ。」

と漸う返事はいたしました、猶ほモチ／＼して判然と答へませんので、少々焦慮氣味で語氣も荒く、

「さア言へ……其方の知らぬことは有るまい、何うちや。」

と掴んだ頸筋一振二振りゆり動かしまして威嚇つけると、今にも首が飛ぶかと恐れ、

「ハイ、申し上げます……ろ、ろ、……蠟燭は……そ、そ、そこ……」

「なに、蠟燭はそ、……ここでは解らぬ、何處にあるか判然いへ。」

と十郎左衛門はぐ／＼して居るが迂かしく、グツと強く掴んだ手に力が遣入りますと、

「あ、痛い、何うか御免なされて……お手をお放し下さいますと、蠟燭は出して差上げます。」

と泣聲を出すに、然らば放してやると、十郎左衛門は掴んだ手を放しまして、

「それ放して遣はした、直ぐ蠟燭を出だせ……何をぐづぐづして居るのぢや。」

と言葉はいよ／＼鋭くなる。料理方の手傳人はオツ／＼身を起し、片隅の押入を開けて一函の蠟燭をヒヨロ／＼しながら持ち出しまして、十郎左衛門の前に平伏いたし、只管哀を乞ふさまの、如何にも憐れでございましたから、

「この一函きりないか。」

「まだ二函三函は……、あれ、彼の通り積んでありまする。」

と後を向きて指を押入の中に指しました、十郎左衛門が見ると成程、同じ函が幾個も重つてありますから、是れで好し、これだけあれば間毎々々に點火ても、夜の明けるまでに燃し切れるものでないと首肯き、

「約束だ、生命だけは助けてやる、何處へでも逃げる……若し手向ひでもしたら生命

がないぞよ。」

と放し遣りますると、彼れはホツト溜息つきて、暗黒に紛れ、勝手知つたる室内を何れへか逃げ匿れて了ひました、十郎左衛門は思ひのまゝに蠟燭を澤山に得ましたから、早くも此處彼處の座敷々々へ火を點け廻ります、今までは鼻摘まれても知れぬ室内、戸障子は手當り次第に撲き毀し、足蹴に掛けて踏み推き、僅に雪を照す月明りを室内に引きましたものゝ、少し奥まりたる座敷は暗黒界でございましたのが、十郎左衛門が機織の側きで、間毎／＼に蠟燭を惜気もなく點けて晝を欺くやうに成り、味方の掛引き室内の搜索に大層便利を與へました、磯貝十郎左衛門が間毎々々に燈火を點けました氣轉は、敵の二人三人斬り斃したより、遙に大なる手柄で、味方の勇氣を増させたこと、莫大の功でございます、然れば之れに氣を得て進退の掛引きは勿論、足場も自在となりましたので、ソレと言ひ合したやうに氣を描へて、雨戸障子は申すに及

ばす、襖に至るまで奥へくと進むに従ひ蹴こはし打毀きます音は物凄く、敵の上下を戦慄させますうちに、忽ちにして館の内は數百疊を敷く大廣間の如く成つて、明見々たる燈火は次第に殖えてまゐり、蟻の這ひ出るも一目に見え透く様に成り、味方の戦ひのさまは有りくと一幅の畫圖を展開したバ、ハ、マの如く映じ、上野介いかに巧みに匿るゝとも、或は逃走を圖るとも、天翔る鳥、地に潜る土龍蚯蚓にあらねば、通れる路とてございせん。

七五 小坊主の斥候振

表玄關から討て入りました東組の一手に向つては、随分激しく抵抗したのもあつた、闇中に白刃の光り閃き、夏々の響き凄く室内に籠り、懐恰の氣肌膚を襲ふやうでございましたが、西組の裏玄關を破つて亂れ入りました時は、殆ど抵抗する者が無

かつた程で……僅にお坊主の鈴木松竹が、戸障子を打ち毀す音に吃驚いたし、逃走路の戸惑ひをして、小玄關にヒヨロ／＼出て來たを、關東猛進派の旗頭として武雄絶倫、同盟の勇士から尊敬されて居ります堀部安兵衛が、薬人形を斬ることく水も溜らず大太刀の一撲に、聲も得立ずドタリと斃れたばかり、暗を縫ふてバタ／＼と逃回る男女の悲鳴、グワラ／＼バタリ／＼ドタリバタンの破壊の音に荒膽を潰し、殊に十郎左衛門の氣轉で、間毎／＼に蠟燭を點て室内を照したから、追々奥へくと進んで行きました、斯ういふ光景から見ると奥向には豫て用心も手薄であつたかと疑はれませんが、決して其様譯ではない、吉良家では世間の風説に聞き怖をして、用心の上にも用心をいたし、上野介などは自分の邸内に居ては心許ないと、白金三光町の上杉家の下邸に身を潜め、大藩の庇護を受けても猶ほ枕を高く眠られなかつた程でございすから、上野介が家に居ますのに、其住居にいたして居る奥向き、隠居所の手薄な警

護で安閑として居ませうや、近頃復讐の風説も、人の噂の七十五日過ぎて、世間の記憶にも遠ざかり、又吉良家は直接の關係もあること、上杉家とて重婚の親子關係がございませうこと、赤穂遺臣の舉動に就いては探偵に非常の苦心をして、只管その防ぎ方に心を用ゐて居るは、上杉家から附人として十餘人の屈強な剛の者を、吉良家へ入りこませて、萬一の備へ嚴重であつた程で、大石等の欺計に掛つて、幾分か弛んだかも知れませんが、決して枕を高く寝て居る氣遣ひはなく、相當の宿直も居たことは明かでございまするに、夫等は不意の襲撃に遇ひ、殊に火事よくと叫ばれたに狼狽した結果であらうと思はれます。

こんな想像は暫くおき、當夜吉良家では茶の湯の催しがあつて、其の座敷は内玄關より上ると、右の次の間をまた右に取つて廊下に出で、尙一室を通りぬけて茶室……數寄屋がございませうから、當夜は此處に風流な會が催されまして、上野介の居間へ入り

ましたは亥の下刻、今の午後十時過ぎ、この居間は茶室を廊下へ出で鍵の手に右に曲り、突當つて左に縁側傳ひ中庭を隔てた一間の次二間が、上野介の居間でございませう、此の居間と押入を隔てた、裏手の北向に溜の間があつて、宿直のものは此處に休息して居るのが例でございませうから、今夜も此處に寝てゐた者もある、又身分のある連中には、夫れく居間の手近に宿直の場所が設けてあつたさうで……併し何處が宿直部屋であつたかと云ふことは、未だ確かな證據を見出しません。

裏門から上野介の居間までは、間數にして直徑約二十間で、玄關より上り寄附の間からは四間を経て、中庭をおき次の間があつて、居間となるので、間數としては五室を隔つて居りますが、僅々二十餘間の處、裏門の破壊される音も手に取るやうに響いたでございませう、また火事よくと騒ぎて喚き散じた聲も聴えたでございませう、況して玄關より亂れ入る騒ぎ、戸障子を打ち毀す狼藉も、知らずに寝てゐる者はあり

ません、殊に上野介は六十二といふ年寄で目覺いから、裏門が破られる音に目を覺しますと、常に不安の心に驅られて居る身には、直ぐ危険を感じ易く、床の上に起き上りましたは、警に申す臈に疵もちや筈がはしるで、胸にギツクリ来るものでございますから、ハテなと耳を濟して聴くと、今度は火事といふ聲がする、火事か、火事ならば家を焼くばかり、我が身に災厄はなしと、少しく胸を撫で下し驚きの爲跳りあがつた動悸の、まだ鎮静りませんうちに、ワツト擧げる東西から相應する喊聲に、上野介の眉は見る／＼、深い八字形の皺を刻みこみ、何處ともなしにハツタと睨みました眼中、怪い光を發つて憂ひの色が浮び、ホツト吐く溜息は白い虹のやうに長く、短檠の洗んだ淡き光に映しました、倉皇しく、

「坊主！坊主！」

と呼び立てますと、宿直の當番であつたお坊主、年は漸く十七かで、商人の子で

ございますが、上野介の寵を得て、常にお側にある牧野春齋、聲に應じて、

「ハ、ア……」

と答へて御前に入る。

「春齋、あの物音を聞きやつたか。」

「仰せにおちやりまする、容易ならぬ體、御物見いたいて参りませうや……」

と年は若い中々利發者、上野介の氣色を察して即座の答へ、

「お、様子見てまわれ！」

と命じてゐる處へ、バタ／＼と入つて來ましたは、上杉家よりの附人で、今夜の當番でございます、大須賀治郎右衛門、清水一覺、鳥居利右衛門の三人、何れもおツ取刀で、股立高く取りあげ、

「春齋、お物見いたすに及ばず、只今赤穂の瘦浪人ども、表裏の兩御門より押入つて

おちやる……御前、お支度を……」
と先づ口を切つたは大須賀治郎右衛門でございます、續いて清水一覺も言葉急しく、
「斯く御座あつては危し〜、一刻も早くこの場を御立退なさるが宜しうおちやりまする。」

と頻りに姿を隠せと進める尾につき、鳥居利右衛門もまた口を開き、

「清水氏より申上げます如く、即刻お立退きなさるが安全でおちやりまする、なに決して御心配成さるには及び申さぬ、我れ〜三人お供申し上げるからは、假令赤穂浪人が何十人推参いたいたとて、我れ〜が生命に替ても……のう各……」

「鳥居氏の仰せられる通り、不肖ながら治郎右衛門とて……」

「拙者として御當家の御外聞に相成るやうな儀はいたし申さぬ覺悟でおちやる。」

と一覺も勇ましく力を付けましたので、上野介も漸う身を起し、帯を確と締めたまゝ、

寝衣姿で覺束なく立ち上りますると、氣轉者のお坊主春齋、甲斐々々しく短刀取つて渡すを、上野介は前半につけ、三人に守護されて密かに居間を忍び出でました。

春齋は主人の出る姿を見送りまして、我が詰所へ取つて返し、短刀腰に打ち込むや、坊主頭に晒木綿の鉢巻確と結び、裾輕々と引きからげ、上野介の後を慕ふて駆け出さんとしました、又立止つて居間の杉戸に仕掛てある鉾前ピンと下し、斯うして置けば敵が踏み込み來るときは、打ち毀して闖入する隙がある、縦や一時にても暇取らずは主君を安く忍ばす手段とならうと、己も主君の前途を見届ける殊勝な心で、慕ひ往きまするは、天晴なる振舞でございます。

「お坊主、お坊主。」

と呼ぶものがあるので、春齋は後を見ますると、是れも上杉家よりのお附人でございます、ます榊原平右衛門、

「榊原様で……」

「お、御隠居は何處におちやる、其方は承知いたして居らうがな……」

「ハ、今一刻前、大須賀様、清水様、鳥居様の御三方がお供遊ばしまして……」

「左様か……何方へ渡らせられたぞ。」

「お縁側傳ひは人目につき易いと仰せられましたな、お取次間からお上り口の大戸潜りより、お表の方へ落ちさせましておちやりまする。」

「ウム……」

「いざ、私が御案内いたすでおちやりませう……」

と、春齋は先に立つてスタ／＼駈け往く、是れに續くは榊原平右衛門、暗黒の中も勝手馴たお坊主の案内で、闇を縫ふて主君の跡を慕ふて参りまする。

七六 廊下に主從邂逅

上野介を始め裏門寄りの方に居ましたもの、皆騒動は奥から起つたと思つて、表の方へ逃げ出しますると何ぞ圖らん、表玄關よりも亂れ入つて、左兵衛の居間近くまで、最う押掛け／＼侵入して来た、奥の者は表へと逃げる、表の者は奥へと志して逃げ込みまするので、屋敷の真中頃は雙方から逃げて来たもので、ごたく／＼して居ます、此の體を見ました大須賀治部右衛門は、

「各如何に思召さるゝ、斯く混雜して居ること幸ひ、方様の御供いたし一時御窮屈でも中の御湯殿に難を避けさせられ、敵を遣り過して安全の場所を見立申さんは……この場合、敵は早御當主の御居間近くまで参つて居りやるわ。」

「兎も角も敵の目に掛らぬが何よりでおちやる。」

と清水一學も同意する、鳥居利右衛門とて素より異存のありやうがない、最う既にオ
 ヅ／＼して居る上野介を介抱して、先湯殿に忍び三人は息を殺して身を構へ、若し戸
 を押破つて入る者があつたら、其の時こそ百年目、一命を賭して防がんと、拳を握り
 刀に反を打たす居合腰で、少しも油断なく控へました、板戸一枚外は右往左往に逃げ
 る足音、白刃を合して斬り結ぶ音さへ聞える心元なさ、今にもあれ白刃頭に下るか
 と胸のみ轟かして居る。

吉良主従の漸う此處まで逃げ延びました頃には、西組の二番手に屬しまする牽制隊
 は思ふ存分長屋の者を威嚇いたし、最早出會ふ人も無い模様でございますから、西組
 の總指揮役吉田忠左衛門は、二番手の十一人も猶豫なく小玄關より室内に放ちました、
 又東組の一番手二番手ともに、戦ひ漸く闇に相成り、斬つて出る者は大概出で、女子
 供の泣叫ぶこゑ、押入の隅物置の中などに下賤の男女、蚤のごとく頭ばかりを突込み

て隠れ、殆ど手に立つ程の敵は影を潜めて了ひました、一日湯殿に潜みて難を避けた、
 上野介主従は場所が安全でない、戸一枚打毀されたら中はガンガランの湯殿、奥まで
 一目に見徹せるは危い、室内の混雑少しく静まつたを幸ひ、何れか完全の場所に潜匿
 せざれば發覺の恐れありと、鳥居利右衛門先廊下へ出て室内の様子を親ひまするに、
 其處は狼藉を極めて慘澹たる光景であるが、幸ひに敵も味方も彷徨ものがありませ
 んから、此の際に乗じて表の方より遁れ出んと主従四人、我が家ながら拔足差足前後左
 右に心を配り、十數歩しますれば忽ち出會頭に突當つた二人、利右衛門と一學はキラ
 リ引抜き、斬つて掛らんとする、先方でも驚き一刀キラリと引抜けば、白衣を纏ふた
 一人短刀逆手に翳しながら、雪明りに透かしてゐましたが、
 「あゝ鳥居様でおはするか、御不審の者ではおちやりません、榊原様と春齋！」
 「これは御三人でおちやつたか、御隠居様には在さぬや……」

と、榊原平右衛門が言葉を掛けると、鳥居利右衛門も清水一學も大いに安心いたし、
「榊原氏でおちやつたか……御隠居様には我等三人御供いたし御無事でおちやる。」「
「それは執着至極、拙者も各の立退かられた跡に参り、お坊主の案内でお跡を尋ねて
居つたちや、是れより何れへ……」
と、榊原平右衛門は不審さうに眉を顰めますると、清水一學は聲を潜め、
「表の方より押入た敵は、お奥へ参つた様子……その虚に乗じて……」
「それは以ての外……」
と、平右衛門は頻りに頭を振ります、其の尾についてお坊主春齋は進み出て、
「お表の方には今宵押寄せた徒黨の大將分とも見える者、油断なく眼を八方に配り、
附従ふ三五人のものども、槍を抜き太刀を翳して控へる嚴重な有様、中々行届いた手
配りにおちやりまする」

「お坊主の言上、露、聊か相違おちやらぬ、放心出まらば敵の術中に落ち、如何なる
権事の出来せんも圖り難い、此の場合是非に及ばず鋭鋒を避け、御身の安泰を計られ
るが焦眉の急でおちやる。」
と、平右衛門は熱心に危きを説きますれば、春齋も表門の方より遁れ出づべき隙なきを
諫めまする、斯くと聞き居たる上野介は、大小名を手玉に執らんばかりの權勢を有ち、
高家の筆頭と城中に肩で風を切つて辣腕を揮つた昔日と替り、戦々競々屠所の羊に異
ならず、唯だ左右にある三人に杖と繩り柱と凭れ、本封還りも過ぎた白髪首を生命と
共に預ける今の心細さ、多年恩顧の家來も多くあるに、上杉家よりの附人三人の外側
に居ぬかと思ひますと、人の心の奥ぞ知られて悚然たる折柄、同じく上杉家よりの附
人ながら榊原平右衛門は来てくれる、弱冠なれども氣轉者の牧野春齋の慕ひ來たは、
また我れを守護してくるゝ者の殖えたに、幾分の心丈夫になつたやうで、躍れる胸を撫

で、居りました、大須賀治部右衛門は猶奥の方にて戸障子を破壊する音に耳を済し、
 「表裏の兩所から押し込んだ狼藉者も、今は雙方合體して、御在所を血眼になつて探
 すでおちやらう、一刻も速く安全な場所へお供いたさいでは適ひ申すまじ……」
 「彼れ是れ長評定に時を移し、見附られては御大事、此處にて小田原評議いたさう
 より、敵の去つた後を窺ひ、適所を求めるが肝要でおちやる。」
 と、烏居利右衛門も同意します、清水一學も、新來の榊原平右衛門も、それ然るべし
 とあつて、廊下を右へ左兵衛の居間の後に當り、物置の方へと指して行く、お坊主の
 春齋は、

「私、お瀬踏いたし申さん……」

と、殊勝にも人々の眞先に立ちまして、往手の見えぬ曲り杯に參ると、壁の蔭に身を
 寄せ頭のみ出して先を窺ひ、人の姿の見えざる時は身體を現はし、落行かんとする次

の室内までも斥候して、いざと案内する周到の用意に、四人は上野介を寢中に圍ひま
 して、漸う物置のところまで逃延び、左兵衛の居間はお室内の模様を見渡しますると、
 戸障子は素より襖も押入の建物まで残りなく、打ち毀し蹴散して、算を亂し處々に蠟
 燭を點けて暗黒を照してある、其の光景は轉た慘澹たるもので、今が今まで隱居の物
 好から驕りを極め、障子唐紙に至るまで、好を盡したほどでございませうから、諸道具
 類は申すに及ばぬこと、結構な器物もこんな場合には顧みるものなく、踏み毀されて
 其處此處に轉がる中に、朱に染みて斃れるもある修羅の巷でございませう、春齋は其
 處等をうろくくと見廻りましたが、東組の通過した跡で、幸ひ見附けるものはなかつ
 た、この折は早や戸障子を打ち毀す音もしないやうに成る、ハテいよく雙方の寄手
 は合體したと見える、是れは放心してゐて見附けられては大變であると、惘かな春齋
 はアタフタと走せ來て、

「最早一刻も油断のならぬ形勢でおぢやります、お館の内を逃歩くは却つて危いかと存じ申す……敵のお在所を探すには、先づお館の隅々まで探すやうに考へられらるで……一番この裏をかきお庭傳ひに……」

と、云ひまする、一同も流石利發ものと感じまして、鳥居利右衛門、

「お坊主の存じ寄り、至極尤もと思はるゝぢや、敵に覺られぬやう、お庭傳ひに何れなりとも御越しあつて然るべし、此處に居て今にもあれ敵の目に留れば、お互の心盡しも水泡と成り申さん、若し途中敵に出會したる時は、拙者身命を賭して支へ、必ず無事にお落し申すでおぢやらう、万一の場合は各方は拙者に構はず、お供成さるゝやうに……」

と、深い決心ある如くに言ひました、大須賀治部右衛門も軽く首肯き、

「鳥居氏、御配慮のほど、治部右衛門不肖ながらお引請申しておぢやる。」

と、挨拶いたす四人の胸中には脱い電流が傳はつて居ました。

七七 隣へ塀越の挨拶

西組の屋外を攻撃した一手は、長屋から飛出す者なくなつて、四邊は寂々として唯だ白雪皚々、照す月明に黒い影を認めますは、味方の手持不沙汰に人なき境を巡回するまでと成りましたから、此の手の指揮役吉田忠左衛門は、戸外にゐる者はみな室内に侵入せよとの命令を下す、これに勇氣を増した屋外勤務の面々は、バラ／＼バラ／＼と勢ひ込んで亂れ入り、我れこそ當の對手、上野介の白髪首を獲て、亡君の尊靈に手向け奉らんものと、勇み進んで庭口より侵入するもあれば、小玄關より突撃するものもございまする、屋外にある人々の皆室内に突入しました隙を窺ひ、吉良家の徒士頭石川彦右衛門は、ノツソリ長屋より出て来る、之れに續いて左兵衛の祐筆鈴木元右衛

門も現れた、屋外の警戒に注意いたして居る、吉田忠左衛門、小野寺十内目早くも認めましたから、扱は敵こそ御参なれと、小野寺十内槍を捻つて先に進みし石川彦右衛門に渡り合ますと、吉田忠左衛門も同じく槍をビタリと鈴木元右衛門に付けました、二番手勇士の牽制運動に恐れて潜伏してゐた程の兩人、いかで兩雄の槍先に敵し得られませう、二三合戦ふうちに、兩人とも脆く申指しに成つて倒れて了ふ、忠左衛門は槍をぬくや、雪にザク／＼血糊を洗ひながら、

「小野寺氏、この鹽梅ではまだ氣紛れものゝ現れるも知れぬぢや。」

「いかにも……縦や三人五人出で来たとして、何程の事がおちやるぞ。」

「端た者の來をるは構ひ申さんがの、一體隠居といふものは、館の奥に棲をくふもので、う、上野の居間も内偵通りなら、この奥でおちやらうて……」

「おう左様あり居らう。」

「ぢやに依て、何時この方面より通出さうも知れんぢや、お互に此處の監視が大事でおちやらうて……」

「おう、我れ等兩人眼を皿にして視張たなら、ヨモ視通しは致すまい。」

と、兩雄の間には協議が成立ちましたが、裏門の警戒を捨ておく譯に参りませんから、

「問氏！」

と、忠左衛門は呼び掛ける、間喜兵衛は、

「おう……」

「貴殿は御苦勞ながら裏門の守をお引受け下されい。」

「年寄相應の役、確かにお引き受け申した、まだ二人三人の敵に後れは取り申すまい

ぢや、御安心下されい。」

と、老堀部を除くは同盟中の高齢、六十八歳の間喜兵衛は槍を横へて裏門に眼張りま

す、忠左衛門と十内は、左右に分れ邸内の周囲を巡りて油断を致しません、十内は北寄の方を警戒して居りますと、此處には長屋が五軒ございまして、其の先に大きな池があつて橋が架つてゐる、池の向ふには辨天の祠がある、夫れから外の處には稻荷の社がある、堀に添ふて數十歩のところには番所が設けてあつて、邸内の非常を戒めて居たものゝやうでございます。

又堀を堀にいたして隣家で、裏門に寄つた方は土屋主税の邸、表門に寄つた方は本多孫太郎の邸でしたが、土屋邸にては堀際に高く提灯を掛け列ね、家來は得物くを携へて嚴重に固めて居りますは、万一の變に備へる手配と見えました、十内はツカくと堀際に進み寄り、

「土屋様の御家來衆に一言申し上げ度うおちやる、堀越に申し入れ、御無禮の儀は平に御許し下されい。」

「おう……」

「拙者は舊赤穂の城主淺野内匠頭の臣、小野寺十内秀和と申すもの、我れく同士の者相計り、亡主の體慣を散ぜんが爲め、今夜當邸へ推参いたいておちやります、決して御館へ御迷惑相掛け申す儀は仕らぬ所存、我等同士の衷情御察下され、御見逃しの程願ひ上げる……」

と、言葉清しく大音聲にて申し入れ、會釋をして悠々と其の場を退き、再び眼を八方に配つて警戒をいたす態度は、天晴一味徒黨の參謀總長たる振舞、誠に立派な掛引で、北側の警戒を終り今や池の渚に参ると、ザク／＼ザク／＼凍つた雪を踏み、跡を尾ける足音がします、心に一點の油断もない十内は、歩きながら後を振り返ると池の彼方の茂みに、姿を隠す者がある、扱は家中のものが我れを覗つて尾け来るに極まつたり、何程の事や爲し得ん、飛掛らば只一突と、態と氣の注かぬ狀して、猶ほ北の裏

口を警戒して居る大膽さ、然れど室内に飛び込めては刀の錆に殺して了ふ迄だが、捜索の時間に妨げをするは極つて居ますから、室内に入れずして、抵抗つたら打つて捨んと監視するを、敵は然る餘裕があらうとは嘆にも思ひませんで、ます／＼足音をぬすみ、身を月影によせながら段々近附いてまわります、十内はいよ／＼来たなと、犇犇と側まで引つけ、身を捻ると大喝一聲に、

「何者！」

と叫びましたので、敵は其の勢ひ猛烈なのに吃驚し、ギョツとして立止りましたが、直ぐ斬込んで来るは、恥を知るの若者、十内はヒラリ身を交して置いて、エーと突く槍先危く外しゑしたが、袴の裾を縫はれた穂先を切つて拂はんと、早くも煙巻の下目掛で斬りつけを、十内は既に手許へ槍を繰寄せ、彼を斬り付ける折は其の太股にグサリと一本参りをした、到底も適はぬ對手と思つたか、夫とも臆病風を急に吹きつ

られたか、槍を此方へ抜き取る機会にヨロ／＼と倒れ掛る足を踏み占め、一生懸命に逃げ出して姿を隠して了ふ、十内は逃げ往くあとを追ひもせず、只見送り、

「些しは手耐へある奴かと思ひの外……逃げる者を追はぬは掟、生かして置いても牝魔する氣力もあるまい……」

と、微笑みつゝ佇立みますと、此時東組の片岡源五右衛門其場を通り過ぎながら、

「やア、十内殿遊ばした。」

と、云つて行く、是れ左兵衛の中小姓である伊藤喜左衛門でございました。

此時東組も西組も合體して、注意深き人々は、屋外にも心を配り怪しと見れば、飛び下りて敵を漁つて居ります、十内は六十歳の老人なれども氣丈の性質、敵の三人四人と渡り合つたとて平氣、勇氣は日頃に十倍し、手耐へある敵の來たれよかすと、槍を小脇に掻いこんで待設けます處へ、又ヒヨロ／＼と現れ出たる一人、蟲螻蛄に均しき

ものを殺すは可惜殺生、逃るなら逃がしてはんと態と猶豫いたすを、老人と見て取つたか、或は血迷ふ狼狽の餘りか、夢中で斬つて掛つたは料理人の岩田彌惣兵衛、十内はサツと身を交しつゝ、エーと突出す手練に肋腹をグザリ、突かれながらに、

「南無阿彌陀佛！南無阿彌陀佛！」

と、二聲を置き土産にバツタリ倒れまする。

また裏門の守備に當つた間喜兵衛老人、年は取ても中々の利かぬ氣性、槍を杖にして四方に目を配り、敵出で来たれば亡君へのお土産、一人でも手に掛けて御奉公收めをせんと、鶉の目鷹の目老眼をしぼくさせて、待てば甘露の日和とやら、喜兵衛の前を横切りまして、小玄關の方へ馳せ附ける一人がございます、占めた、此奴槍玉にあけて呉れうと、ペラ／＼と追つ掛けながら、

「待て！」

と、高く喚きますると、

「老耄の支へ立て、斃ばつて了へ。」

と、毒口きゝて小刀で斬つて来る、喜兵衛この悪口に劫を沸しまして、

「憎き雑言、思ひ知れ！」

と、勢ひ鋭く突き出す穂先は稻妻の如く、忽ちグザリの一本に口程もなく、アツと叫んで墮れたは、杉山與五右衛門と云ふ既を預る頭丈者。

七八 居間は蟬脱の殻

東西兩組の勇士は、屋内を縦横に駆け巡りまするが、最う抵抗する者は無く、逃げたものは逃げ、匿れるものは匿れたと見え、廣き館のうちも寂寞となりましたが、未だ上野介の居間は何れであるか知れませんが、大石瀨左衛門は彼方此方の幾間か探して

一旦庭前に下り植込の間など漁つて見たが、隠匿して居る形跡がない、殊に注意綿密な吉田忠左衛門が、凄いに警戒を怠らない北側の庭に、疎漏な見落しがあらうとも思はれませんか、此の上は屋内で上野介の居間へ踏み込み、奇功を奏するに若かずと意を決し、北向の入口より飛び込みますと、大戸の潜りが開きかけに成つて居て、人の忍び出た模様がございました、此の大戸の潜りは右にも左にもあつて、開きかけに成つてゐるのは右手の方で……左手はチャンと締つて居ましたから、瀬左衛門は其の開いて居る方より潜り入ると、取付の間は向つて壁、その右方は座敷、左の方は土間となつて居りますが、座敷と取付の間との中に三尺の壁があつて、その蔭にチラリと人影を見附けたので、透さず飛入ると、逃迷つてマゴ／＼する一人がございました、「待て！」

と云つて突然飛び掛りますと、此の者は兩刀を帯するに似合はず、忽ちベタ／＼と

腰を抜かして了ひ、意氣地なく只管に哀を請ふさまの胸甲斐なさに、瀬左衛門は熟々其姿を見まするに、全然下賤の侍とも思はれず、殊にこの邊に彷徨するから上野介の居間位は心得居るならん、一番此奴を脅して案内させ、目指す當の對手に邂逅んと思ひを決しましたから、態と荒々しく領元をグツト引掴みますると、件の侍はます／＼驚き憫て、

「何うか御慈悲の御勘辨を……イエ、決してお手向ひいたす者ではおちやりません、

平にお許され」

と、自ら大小抜いて投げ出し、抵抗せぬ誓ひを立てる弱蟲に、思つたよりも意地も張りも無いのに却つて驚きましたが、脅迫の利くは結句こんな臆病侍に限ると、猶ほも掴んだ手先を弛めませんで、

「上野介殿の御居間へ案内いたせ……ぐ／＼すると容赦なくぶつた斬るぞ。」

と、一喝を呉れました、彼は既う生きて居る心地もなく、ブル／＼慄へながら、

「お臺所に詰る某、御居間の御案内は存じ居り申さねば、御許されい……」

「なんと存じぬとな……宜しい、存じぬなら知らぬで可し、虚言を構へて此の場を逃れんとは蟲の好き白徒、エ、面倒な引導渡してくれう。」

と、瀬左衛門はドギ／＼する一刀を鼻の先へ突付けました、突付けられて今は魂魄も身に副はず、見る／＼中に唇の色も眞蒼になつて、齒の根も合はぬ胴慄ひ見苦しく、

「何うか生命ばかりはお助けを、こ……こ……御案内いたしまする。」

と、斯うなつては主従の見界も何もあつたものではありません、己れの生命さへ助ければ好いといふ浮薄な人心、實にや頼み難いは浮世の人の心の奥でございませ、瀬左衛門は、

「見事案内すれば助けて取らさう……さア参れ！」

と彼の男を引立て二間ほど通り越せば、頑丈な板戸に二枚建に壺金ピンと指した室がございませ、彼の男はこの前に足を留めて、

「こ……こ……此處が御隠居様のお居間におちやります、建具は二重に成つて板戸の下には風流な唐紙……」

と早や迷足を構へて居ります、成程嚴重な戸締といひ板戸の頑丈といひ、如何にも夫れらしく、噂に違はぬ用心と首肯しましたので、瀬左衛門は何時まで弱蟲を困しますでも無いと思ひ、

「最うよい、往け！」

と許しますと、鷹に捕はれた小雀の放されたやうに、跡をも見ずして生命から／＼逃げ去りました。

瀬左衛門は壺金を指した板戸の前に佇みて、四邊の戸障子まで掛拂つてある狼藉な

光景に引替て、此の室ばかりは外部から壺金が下してあるは、未だ誰も中へ這入つた者はない様子、必定上野介この内に潜み居るならん、いさ白髪首申し受けて、亡君の御鬱憤を晴し参らせ、今宵の素懐を遂げんと、壺金外してゾート戸を開けるにも、内より斬て出るもの無しとも云へませんから、十分に身構へいたし、礎と唐紙蹴倒して跳り込みましたが、内は既に蟬脱の敷で温かさうな絹布の夜具蒲團、刎ね上げられもせずチャンと敷いてある、枕頭には有明の圓行燈が點いて、火影が睡さうな隣きを續けてゐる、床には元和元年八十三で歿した海北友松が、雪に枯蘆の圖を掛け、白高麗の獅子形香爐が置いてある、床と並んで遠い棚の下、地袋の上には、刀掛にチャンと刀が架かつてゐる、南に面した塗障子の方には夜風を防ぐ金屏風に、火影のチラチラと閃いてゐるなど、上野介の居間に疑ふところは無いが、一人も人らしいものゝ居らぬに、張合の脱けた瀬左衛門は、室内に茫然突立つて居りますと、續いて飛び込ん

で来たは菅谷半之丞で、

「大石氏！この間の様子では……」

「確かに上野介の居間でおちやる、敵は早くも何處へか逃げ居つたは、お互に残念至極でおちやる。」

「早や逃げ居つておちやるか……え、忌々しくし……」

と、半之丞も腕を扼し拳を握りて、共に落膽しました、瀬左衛門はツ、ト寢床の傍に寄つて片膝つき、夜具の間に手を差入れ、

「菅谷氏！まだ温みがおちやるぞ。」

「やア温みがあるとな。」

「いかにも……」

「夫れでは出て去つて間があるまゝ。」

と半之丞も申しますれば、瀬左衛門は最も同意します時、倉橋傳助、村松三太夫、杉野十平次等も寄つて來ました、猶ほ追々に上野介の居間が知れたと云ふので、此處に集りまして寢床に温か味のあるからは、遠くへ逃げる隙は無いらし、全力を盡して捜索せよと、忽ち一同へ告げ知らせる、斯うなつては何れも一生懸命で、一日千秋の思ひをして今宵望みを達せんと、大膽の振舞に出たるに、當の敵上野介に逃げられたとあつては、當に本懐を遂げない憾みばかりでございませぬ、淺野の遺臣は徒黨を組み復讐呼ばりをして、吉良の邸へ仕懸ながら、目的を達せざりしは何をしたのであらう、前方よりの噂ほどにも無く血迷ふた浪人共の世間騒がせと、胡盧になるが辛い、世間の噂などに頓着する要はないとしても、折角大切に大切を取つて、いよ／＼討入と決するまでの苦心經營は容易の業ではない、忠義の二字を衡量に掛けて生命を投り出す、武士の意地とは云ひながら恩愛の絆を捨て、父の自殺に憤慨の拳を握るものあ

り、母の自害に暗涙を呑んで腕を扼するものもあり、或は妻子を捨て無情と罵らるゝものもあり、或は身を卑賤に墮して指し笑はるゝものもあるなど、尋常ならぬ辛苦を二十有餘ヶ月忍んだ揚句、今日今宵の討入りに敵に逃げられたとあつては、心外千萬でありますから、假令いかなる處に隠たとて、探し出ださで置くべきか、寢床に温か味のあるは遠く去らざる何よりの證據と、言ひ合しこそしませんが、心から心へ通ふ以心傳心、怪しと見たら天井板も割せ、根太板も揚げて探せと勢こみ、思ひ／＼に間毎の壁を蹴付けて、仕懸のあるや無しやの念晴しをするもございませぬ、槍に天井裏を突きあげて巢を喰ふ鼠を驚かすもございませぬ、或はまた庭前に飛び下りて庭の隅々築山の蔭、植込みの中に至るまで漏らす處なく漁るものもございませぬ、此の時は最う防ぎ戦ふ吉良家のものは、大方斬り殺されたり、傷を負たりして了ひ、恰も無人の境を往くとき光景で、偶々部屋／＼に戦き顛ふ婦人子供が、生た心地もなくブ

ルブルガタ／＼齒の根も合ぬ、哀れな姿を見出すばかりでございます。

七九 庭前の蹴雪奮闘

搜索漸く闌となり、吉田忠左衛門は小野寺十内と謀し合せて、屋外の取締に當つて居りましたが、忠左衛門は一味の副将でもあり、西組の指揮役でもありますから、屋内の注意も怠つてはなりません、進退掛引きを誤つて敵を討ち漏したとあつては、悔て返らぬことでございますので、仰いで星影を視ますと曉の明星は光りを放つも漸く高く、月も西に傾いて光輝白くなつて、夜の明けるには最早間なき空であるに、未だ上野介の在所も知れざるは心元なきこと、南の隅にある茶室際の庭口より内庭に入りまして、踏み散らした雪をザクリ／＼庭傳ひ三方縁に成つて居る處から上り、縁側續きに奥の方へ往かんとしますと、遙に黒き人影が三個四個チラリと認められました

から、忠左衛門は槍を小脇に掻込み、疾風の如く駆け付けたが、黒き影は何處へか隠れて、其の行方を失つて了ひました。

忠左衛門と同じく黒き影を認めて駆け付けて来たのは、不破數右衛門でございますが、

「吉田氏、只今の……」

「人影でおちやるか……如何にも認め申した。」

「拙者は怪しき敵と睨んで駆け附け参つたに、行方を失ひしは残念至極……」

「おう御最も、コソ／＼身を隠す舉動から推察すれば其許のお目録も、我等と違はぬ此の場合三人四人志を同じふして逃迷ふは仔細がおちやらう。」

「居間は脱出しておちやるが、門外へは出るに道なき邸内、事に寄つたら上野介を家來どもが守護をして逃迷ふのではおちやるまいか……」

「または左兵衛かも知れ申さぬ……拙者は縁側傳ひに参れば、其許は庭を今一應お探
し下され。」

「畏まつておぢやる。」

と數右衛門、直ぐ庭へ飛び下りまして、植込燈籠の蔭に至るまで漁りつゝ、左兵衛の
居間の庭へと飛び込む、幾度か人々の通ひし足跡を雪につけ、築山の蔭植込の片隅ま
でも、雪を蹴踏きました形跡が有々と見えて居ります、不圖右手の方を眺めると雪除
をしました赤松五六本、軒を掠めて品よく枝を張る下に黒く蔭くものがございますか
ら、數右衛門は更に油断せず、扱ては怪し、婦人子供の逃迷ふて蹲踞るとも覺えず、
要こそあらめと勢ひ猛に進み寄れば、果せるかな四五人の敵勃然と起きあがり、駈け
来る數右衛門を支へんとする眞先の一人、

「この場は、我等引受けたり、各方はお構ひなく……」

と言ひながら斬つて掛る舉動の仔細あり氣に見える、残る者は双向ふ一人に加勢をせ
んとする模様もなく、皆首肯きつゝ此場を通れんといたしますから、數右衛門は立
向ふこの當面の敵を一刀に斬つて捨て、逃去らんとする四五人を逐ひ撃たんと、精神
こめてエーヤとばかり腦天より唐竹割にして呉れうと、發止打込みまするを、敵も中
中の白徒、心得たりとひらり身を開きさま、横撲りに拂つて来るを數右衛門も飛び退
きました、鋒銳は猶ほ羽織の裾五六寸ザクリ斬り裂き、此方より打ち込める隙なく
激しく斬りまくる手練、天晴吉良家の剛の者と見て取りました數右衛門は、斯る勇士
の守護に立つ一群こそ、必ず上野介にあらねば左兵衛である、あれ取り逃してはと氣
は逸りますが、懸合敵は右に支へ左に遮りて、少しも隙を與へぬのみならず、我れ此
處にあり、汝等に一步たりとも進ませんやとの振舞、いよ／＼心憎きまでの倒きに
質豪放にして負じ魂の數右衛門グツト癪に障つて、已れやれ汝に支へ立されて囊の中

の鼠を逸し去るべき、忠義に凝たる我が白刃の錆と消え失よと、阿修羅王の暴出した如く憤激してエート打ち下せば、エート答へてガツチリと受け留め、双方必死の奮闘悪戦に敵は數ヶ所の傷を被り、鮮血淋漓として流れ手足を朱に染めながら、更に萎む舉動もなくなります。勇氣を倍せば、此方の數右衛門も激しき闘ひに小手から羽織、小袖はバラ／＼に切り裂れて風に破れた芭蕉のごとくになりましたが、幸ひに衷甲をいたし居るので身には微傷だも負ひませんから、其の勢ひはいよいよ猛に閃く太刀は電光の暗を射るに似て、眼にも止らぬ凄い光景でございます。

兩雄虚々實々秘術を盡して奮闘突撃する状は、雙龍玉を争ふに異ならず、胡蝶の花に戯るゝが如く、寄るかと思れば忽ち離れ離れしと思へば直ぐ寄り合ふてチャン／＼バラバラ散る火花に、暗に煌く電光石火、勇ましくも物凄きやうでございましたが、彼方は素肌此方は衷甲を十分に着して居ること、氣は少しも撓みませんが、數ヶ所の負

傷は身體の働作を妨げ、進退の自由を缺きて意の如くなりませぬので、流石の強敵も數右衛門が大喝一聲、躍り込んで打つ鋭き太刀を外し損じ、物の見ん事左の肩先より斬りこまれ、ウーンと叫んで雪中にグワツバと仆れ掛るを、得たりと斬り込む二の太刀の早業、股の附根を深々とバツサリ、斬られては最うバツタリ拳を握つて登れたを現世の名残、數右衛門は刀の血糊拭ふて其の刃を見ますと、是は如何に刃は缺虧てまるで鋸の如く成つて居るには自分ながら呆れたと申します、後にこの戦鬪のことを原惣右衛門がその親しき友に報じまする手紙のうちに、先づ間十次郎、武林唯七が上野介の首級を擧げたることを云つて、

其の次にこの働きよりも大に働き候處は、不敵數右衛門に候、勝負いたし候相手も形のごとき手きゝにて、數右衛門にも數ヶ所斬付候へども、着込の上に候故、疵は無之候、小手着物は悉く切さかれ申し、其刀身はみな無之様に罷成り候、四五人も

切とめ申候積りに御座候云々。
 と申し遣はしたのを見ても、數右衛門が如何に能く働きましたかを知ることが出来る、さうして此の最も強敵は誰であつたらうかといへば、吉良家に然る者ありと知られた、六勇士の一人で上杉家よりの附人、上野介のもと用人を勤めて五十石も食みました六、十歳の鳥居利右衛門で……赤穂浪士の討入と知りますと、上野介の方の危きを察し、危急を避ける爲め他の人々と共に表方へ立退かしましたが、此方も安全な場所でもございませんから、赤穂浪士の立ち去る間毎や裏傳ひに逃げまはり、庭傳ひに再び奥の方へ難を避けんと、左兵衛の居間なる庭前に下り、堀際植込を縫ふて奥に到らんとする折、同盟の勇士は上野介の寢所を襲して見ると、既に脱出して居ましたに憤慨し、再び八方に搜索を始め、室内は申すに及ばず、庭中も蚤取眼の人々往來しますので、放心ノソリノソリ行かれまらずで躊躇りゐた處へ、不破數右衛門が慧眼に認められ、最

う是までと覺悟を定め、鳥居利右衛門が矢表に立つて奮闘し、上野介等を難なく避けしめたのでございます、彼れ利右衛門は實に自分の責任を完ういたしました吉良の忠臣で、天晴れな老武士であるが、惜いことには順逆の地位を異にして居るので、其の美名を世に多く知られず埋れ木となり果てました。

茲にまた吉田忠左衛門は數右衛門と別れて、表玄關まで巡回いたし、再び上野介の居間のあたりへ立還りますと、縁側の突當りの佛の間の蔭にチラリ怪しき人影を認め、遁しはせじと進み寄るを、一少年殊勝にも小刀振舞して抵抗つて参りました、彼様なものを對手にするは本意ではございませんが、双向ふ者を捨て置けずと、好加減に扱ひ、逃去らせんといたしましたが、其の勇氣凛々しく一步も退く體更になく、手許へ附け入つて刺さんとする働きに、是非なく一槍に墜して若木の花を散らした、是れ上野介の寵を受けて側近く使はれたお坊主牧野春齋で、この時まで主人を警固して今

こゝに殉死を遂げたのでございます、此の茶坊主春齋のことは、義士の諸書には、討入間もなく目覚しき働きをして忠死をしたやうに書いてございますが、忠左衛門が大目付仙石伯耆守の邸へ訴へ出た口上にも、一少年餘程能く働き、不便とは存じられども是非なく一命を取りしが、勇氣盛なることは吉良家第一番など、申して居りますし、また小坊主一人上野介最後近くまで、主を庇護て能く働きしことも見えますから、討入間もなく遣られたのでなく、上杉家の附人等と共に殊勝な働きをいたしたものと思はれます。

八〇 一喝叱咤の妙機

矢竹に逸る心を抑へ、我れもくと當の敵上野介を討て捕らんと、思ふ心は皆一つで其處此處と探し廻ります中に、横川勘平は萬一敵は便所などに潜むも知れずと、

廊下續きの暗黒を手探りく辿つて参ります、丁度居間の背後とも思はれます處、ガサリくといふ音が聞える、障子に袖の擦れる音とも思はれて、何者も此方を指して忍び寄るやうでございませうから、扱ては敵の潜むと覺えたり、御参なれと槍を構へて待ち掛けましたが、ガサリくの音はバツタリ止み、耳を濟まして聞くと、ギンリギンリと足音の次第に遠くなりますから、我れありと覺つて引返したるか、残念至極と槍引提げて暗の中を睨み、この様子では如何なる隠匿場所のあらうも知れず、油断のならぬ怪しき廊下と、四邊に注意を拂ひつゝ一歩くと探り足で段々と進みます、何所からともなくバツト燈火の反射したので、ハテ面妖なと見詰るうちに忽ち消えて元の闇となつて了ふ、いよく奇怪なり、秘密の機關は必定この廊下にあらん、探り當てなば敵の隠るる所を見出すことも出来んと、勘平は唯一人大膽にも進んで参りましたが、何の怪しと思ふところも見出しかね、ますく怪しみの度を加へ、此の上はと

て槍の躡もて、壁とも云はず板戸とも云はず、力にまかせドシリ／＼と突きつゝ進み、壁ならんと思つて躡に突き試みると、案外にドシンと音した板の響き、此處ぞ曰くあらんと、再び三度力に任せて突き立てれば、ガラ／＼ドシリと柵なごから物の落ちし如き音して戸の内に倒れると、室内にバツト燈火の映しましたから、敵の隠れ場所は見出したりと勇みに勇みに槍を構へて飛び込みますと是れは案外、片隅に女中二三にんさふ人小さくなつて塊り、今入つたともおもはれる下男らしきものワナ／＼と慄へるのみ、勘平は案に相違して、

「貴様達の外まだ隠れて居るものがあらう、さア眞直に言へ……」

と槍の穂先を突きつけますと、女も男も唯恐れ戦き、中にも稍や年取りたる女が恐るおそる、

「御覽の通り狭い化粧部屋、この外に誰も隠れる處はござんせぬ……何うぞ、私ども

の命ばかりはお助けを……」

と手を合してブル／＼顛へて居るさまは、偽りを構へて欺かんとする様子も見えませんから、勘平は豫期に反して室内を見まはすと、傍に一面の鏡が鏡臺にかけ蓋が取れてゐます、ハ、ア今火影の反射したは此の鏡に映つた火が、廊下より逃げ込みしものがあつた時、バツト室外に映したのだなと怪しい原因を覺り、再び廊下へ出で、暗中を探つて奥の便所まで見極め、得る處なく引返して参りました。

また廊下續きの中庭に降りました三四人、彼方此方とうろ／＼探して居りますうち、誰れであつたか横の木の鬱蒼たる下に大穴を見附け、

「大穴！大穴！」

と叫びます、其のあたりに居合したものはバラ／＼と寄り集まり、頻りに大穴の口より差し覗きますれば、四方の雪に包まれて猶ほ更に底も知れざる黒闇々。

「これこそ日頃聞き及んだ間道でおちやるも知れぬ中さぬ……」

「いやこの奥には石室あつて敵の潜匿所ならん。」

「如何にも敵の潜匿所に相違あるまい、中には何様装置があらうも知れぬぢや。」

「このやうに眞闇では何物が潜み居るか分らぬ……燈火を……燈火」

など、喚き叫ぶもござりませぬ處へツカ／＼と駈け寄りましたは、一黨中で最も若年十五歳の大石主税、人々を押分けて穴の前に立ちまして中を窺ひ見ると、人々の構めくも道理で穴の中は眞黒闇、如何にも仔細ありげに見えまするので、物をも言はず突然抜きもちます太刀を鞘へ収める舉動に、居合すものは何をやるやらんと其の意外な振舞に睨きもせず、今は穴よりも其の舉動に心を奪はれてゐる、主税はそんな事には少しも頓着しません、靜かに小刀に手を掛けキラリ抜くよと見るまに、恐るゝ氣色なく身を躍らせて飛び込みました、流石は内藏助の嫡男、年は若くとも父の血統をうけ

た大器量、人々の躊躇するを見、自ら衆を率ゐて危険を犯さうとする大膽さに、大の男幾人か罵されて遅れじものと我も／＼と飛び込んで、闇中を探りましたが何物も居ませんから、舌鼓うちながら悠々と這ひ上つて來た、後に至つて主税等と松山邸にお預けになりました木村岡右衛門、當時のことを語り出で「我等は何れも死を決してゐる仲間でありませぬから、生命を惜むものゝあらう筈はないに、何で彼の時猶豫したかと思へば裏恥かしい心地がしますが、是れに由ても人には勇怯の別があるもので同じ勇にも優劣は免れぬものである、さう／＼主税殿の大膽不敵さあれが、眞の勇猛でおちやる……」と只管に感じて居ります、實に岡右衛門の嘆稱いたして居る通りで、勇怯剛應ともに其の差別は一概に申されんものでございます。

斯ういふやうに八方に散りました同盟の勇士は思ひ／＼、湯殿を探すもの、便所を探したすもの、天井を突き破るもの、床下を根太まで剝すもの、戸袋戸柵は申すに

及ばず、土壁を壊すものもございましたから、縦や天に翔けり地に潜るとも、探し出さで已むべきかと、百方に手を盡して目の届く限りに尋ね漁れども、皆無影も形も見出すことが出来ません、そのうちに東の空はほのくくと白み渡つて將に明けんとする、今は尋ねあぐみて二人寄り三人集り、一味徒黨の面々一ツ處に期せずして集合し、何れを見ても悲憤の雲はその面に横引き、ホツト吐く溜息は如何にも力ぬけて、落膽の光景は物に譬ふる状もありませんまで慘澹の状を極め、

「ヤ、残念！」

と、一人の口より迸しりますると、異句同音にそれに和して、

「如何にも残念でおちやる。」

と、天を仰いで暗涙に咽び、地を睨みて歎歎するもございましたが、

「是れほどに穿鑿いたしても見出し得ぬは、必定取り逃したに相違あるまい、ア、已

みなん已みなん、我れくの武運も最早棄たつたか……」

と、嘆息の聲に一同悄悄として勇氣折け、一騎當千の勇士も皆グツタリと成つて、

「弓矢八幡の加護も盡き果て、斯くなる以上は最う是まで、事既にこゝに至つては何を歎かん、いかに歎くとも甲斐なき今夜の不運、豫ての約束通り當館に火を放ち、一同腹掻捌いて果るまででおちやる。」

と、銘々覺悟の體でございましたが、誰とも知らず、

「我れく勝手に腹切るは何時でも出来ることでおちやる、大夫殿はじめ忠左衛門殿その他に決議の次第を告げ、同じ腹切るなら、四十七人見事一座に……」

との勸議が出るや、誰とて否むものはなく、氣早の壯夫は我れ大夫殿に告げ申さんと投げ出すやうに言ひ、大事將に去らんとする時、老巧の沈着家にて思慮深き村松喜兵衛、この場に來たり斯くと見るより倉皇、大石内藏助を始め吉田忠左衛門に急を告げ

まする、忠左衛門は内藏助の内意をうけて此の場に駈せ参じまするや、兵機に老練なる彼れ、一同の落膽して悄然たる態度をデロリ尻目につけ、大の眼を怒らし、常に變つて底力のある鋭き大音聲にて、

「言甲斐なき各なるよ、敵は確に邸内に潜み居れり、夜はまだ明け放れ申さぬぞ、よし又夜が明けたればとて何事のおちやらう、公儀の御役目が見えるまでは我等の勝手でおちやる、まだく早まる時ではない、無用の心配御無用、御無用！」

と叱咤激勵いたしますると、戦闘の妙機といふものは實に此處にあるので、近くは日露戦役に東郷大將が戦は此の一舉にありとの激勵が全艦隊の士氣を鼓舞し、未曾有の大捷を得られましたも、今忠左衛門が無用くと叱咤いたしたも行き方は同じ機略で、此の言葉を聞きます一同はハット一大刺戟を與へられて、忽ち勇氣を回復いたし、見る／＼中に憂愁の雲は飛散して明月煌々たるに異ならず。

「左様！ 左様！」
と張りのあと訝々した聲は此處にも彼處にも湧き、今度はそれ／＼手を分けきたも大搜索に着手いたしました。

八一 鳴渡る合圖の笛

曉天の霜は日光を遮つて淡き光りを室内に投げ入れ、夜明の風は樹々の梢を鳴らさねども泌々と肌膚を刺し、間毎／＼に點したる蠟燭の火影薄暗くなつて、吉良家の勇者も或は死し或は傷けられ、残るは長屋その他の部屋などに蟄伏する者ばかり、最早出會ふべきものとは狗の兒一疋も居らぬ、寂々寥々として大風の吹き荒したあとのやうでございませう、處で此度の搜索は何れも聲を呑み、足音を偷みまして邸の内外を仔細に巡り、最も偵察に力むる手段でございませうから、人々は彼處に佇立み此處に窺

ひ、眼よりは耳の働きを専らといたし、大の男が拔足さし足身を忍ばすさまは、寧ろ滑稽でございましたらう。

吉由忠左衛門は裏玄關の方へと志ましまして、小玄關を通りぬけ北寄にて裏門より斜に成つて入口のある臺所に出で、先づ湯殿の外に立ちて蹴放しある戸の側に寄り、内を窺へども眞闇にて人の居る気色もありません、湯殿につづく土間を窺ひましたが此處も何の仔細もない、此の土間に續いて猶ほ二ヶ所の土間がある、之れも綿密に耳を聳て、注意を拂つたが、一向に鼠一疋のさうも無い、ガタリとも云ふ音さへしません、夫れより板敷の上をいよいよ足音を偷み、物置とも覺しき所の前に立ち暫く耳を働かせたが、ガタリとも音のしませぬに、臺所には敵の潜む模様もなきかと、既に立ち去らんとする時こそあれ、天も未だ同盟勇士の誠忠を棄ずやありけん、何處とも解らねどもガサリ／＼と小さい音を掠めました、扱てはと忠左衛門はます／＼息を呑み、

耳を濟まして窺ふとは露知る由もございせんから、物置の内で密々との人聲は、一時に外部の鎮靜になつたを、敵は最早浪人どもの退散したるならんなど、語り合て居たのでございませうか、彼の人の密々と私語く聲は物置と覺しき中であると、忠左衛門は信じましたから、玄關に立戻つて僅に残る蠟燭を手にして再び物置の前に立ちて調べますと、外部からピント錠が下してある、其の體は如何にも初めより人などの居らぬ様に見えるに極まつたりと、忠左衛門は、
「人々御出會なされ、物置の内に怪しき人の聲のいたしておちやる。」
と、高聲に呼びました、此の聲を聞きますと、誰も探しあぐねて居るとき、而も忠左衛門が怪しき人聲ありとの知らせでございませうから、之を聞いた面々は遅れじものと、バラ／＼バラ／＼馳せ寄り、

「人聲におぢやりますか……」

「この物置に……」

と、忽ちそこを取巻まする、大力ある三村次郎右衛門は、斧を揮つて二打三打いたしますと、戸は打ち毀されてバツタリ倒れる、中を窺ひ見るに真闇で更に分りません

「燈火ー 燈火！」

と、叫ぶものがございます時、物置の中に居る者は最う絶對絶命、人影の如きもの三個四個ほど動き出したのが幽に認められましたから、

「奥に敵あり、ソレ討留めよ……」

と、奔き出し、氣逸き壯者は討て入らんとしますを見る、忠左衛門は聲をかけ、

「陷阱の設けあらんも知れぬ、氣を注げて入れ！」

と注意を與へました。

「心得ておぢやる。」

と云ふより早く村松三太夫、間瀬孫九郎、間新六などの壯年血氣の若武者、槍の鋒にて大地を突ならしながら、真闇なる物置の中、敵に如何な防備のあらうも知れぬを物ともせず、勢ひ込んで躍り込んといたします、斯う成つては敵は最う斬つて出るより外道はない、縦や斬つて出るとも血路を一方に求めるは容易ではないが、唯だ萬が一に僥倖を以て重圍を脱け得ることが出来やうかと云ふ一縷の望みばかり、考へて見ると心細いこと夥だしい、窮鼠猫を咬むの比喩はあれども、素より二人三人しか味方のないもの、寄手は追々に集合いたして入口を塞ぎ、今は袋の中の鼠でございます、籠の中の鳥でございます、最期の時は刻々と迫つて既や内へ籠み入つて參るものがある、トーン／＼と傳で大地を突きます響は、一突一突ごとに胸に強い反響を與へ、耳元に早鐘をガン／＼と撞かるゝやうで、死は期しながらも猶ほ腸まで刺される心地が

致し、斬つて出る機会が更にございませぬ、其のうち室内へは三人五人大膽不敵にも奥を指して突進して参る模様が見えますので、絶體絶命となつて今は一刻の猶豫も與へないことに成る、最う堪りません、奥よりは唐突に茶碗をバラ／＼バラ／＼と投り出す、其の勢ひ猛烈で當るべからず、流石の勇士も踴躍ふに、敵はます／＼手當り次第に投げ出しました。

「敵は窮して今に斬つて出るに極まつた、茶碗礫に當つて怪我するな。」
と、年配の勇士はこの形勢を察して逸る同志を戒めて居りますが、壯き人々は隙あらばと機会を窺つて居ると、敵の投り出す茶碗小鉢または皿などの類は暫くで盡き、果ては木炭を投り出す、薪雜木に至るまで手當り次第に投げ散らし、寄手を奥へ入れじと力めまするものの、投げ出す材料は僅の間で盡き、投り出す品も次第に函の毀れ、棚板の剝がしたものと成りましたから、寄手はその材料の盡きたを察し、

「進め、敵は既に投げ出す物に盡きたり、進め！」

と、下知は傳へられました、左なきだに隙を得て飛び込まん機会を窺つてる矢先、そして二人三人駆け入らんとするを、奥に潜みました敵も百計つきて疾風の如く斬つて出ました、眞先に飛び出しましたは吉良家に然る者ありと知られた、六勇士の一人でございます、上野介の近習役で上杉家よりの附人清水一學。

「瘦浪人の分才で、歴々の御館を騒がす無禮者、覺悟せよ！」
と、罵り狂つて斬つて掛りますを、クワツと怒りて三村次郎右衛門、衆を排して躍り出で、

「この期に及んで噓言吐かんより、瘦浪人の腕前見せてくれん……」
と、懸合まして丁々發止と斬り結ぶ、清水一學は名だゝる兩刀使で手腕前も天晴のものでございませぬから、次郎衛門とて脆く打果すことは叶ひませぬ、此方の打ち込む太

刀を一刀で斜に拂つて来るを、次郎右衛門體を開いて空を打たせ、疊かけて打てば敵は飛び退りさま、小手を伸ばしてエ、と斬て下す、打てばカチリと受けて又斬り込む一上一下秘術を盡して争ひ雙方優り劣りも見えず、何時勝負のつくとも分りませんから、斯る戦ひに手間取れるは味方の利にあらずと、赤垣源藏、潮田又之丞、一時に左右から斬て掛る、一學いかに勇ありとも強敵三人まで引受けては、到底も敵對するところが出来ません、忽ち斬り立てられ次第々々に後退りをして壁際まで追詰められては身を交す場所なく、源藏の正面より打つ太刀を受け損じ、眞甲より斬りこまれダヂ／＼とする處を到頭斬り伏られ、臺所にバツタリ墮れるを現世の名残、健氣な忠死を遂げました。

清水一學の名は講釋や浪花節、または芝居などでお馴染みがある、吉良家隨一の勇士として傳へられて居るものでございますが、又忠臣藏の中に出る人物で鯉坂伴内とい

ふ道化役があつて、高師直の近習役で滑稽なことをして観客を笑はして居る、之れが清水一學を當たものだと云ふことは、元祿快舉別録の中にも詳しく書いてありますから間違ひでないことと云ふは、又清水一學が女の着物を被つて、磯貝十郎左衛門に斬てかゝり、大石主税と兩人を兩刀で扱ふとの説もございすし、其の最期の討死も倉橋傳助、武林唯七、菅谷半之丞の三人と斬結んで、半之丞に肩先を切られ、それで最期を遂げたやうにも書てあるのもございす、併しこれ等は信じられませんが、清水一學は上野介の最後近くまで守護して、いよ／＼といふ場合に斬つて出で忠死を遂げたことは、彼れの死體が臺所、上野介が其處其處と逃げまはつた後に隠れました、物置の前の臺所で奮闘の果に死んで居たことは、検視の書類などにも擧げてありますから、之れを正しいものとして執るが正史を綴るものゝ本分であらうと思はれます、で、一切前の諸説を排しましたから、彼れの最期はお馴染に膾炙して居る程、花

やかなものと成らない、四圍の状況からしても左様花やかなもので無かつた、兎角實説になると面白味は薄くなります。

八二 尋常に名乗候へ

清水一學が最期の快戦を試て居ります時、同じく黒間々の内から斬つて出ましたは、是れも吉良家六勇士の一人で、上杉家よりの附人上野介附の用人大須賀治部右衛門でございませう、今を最期と斬つて出たので、其の猛烈なことは流石同盟の勇士も一時サツと左右に開いた程でございませうが、武勇絶倫と一黨から押れてゐる堀部安兵衛が、其の働き振を見るより、おのれ曲者御參なれ、安兵衛が引導渡して呉れうと、大太刀引つ提げてヌツト出でましたに、大須賀治部右衛門も扱ては天晴の武者振かな、此奴を斬つて落せば寄手の勇氣を挫き、一方の血路を得る萬一の僥倖あらんと、猶豫

なく猛然として打ち込でまゐりまするを、安兵衛は心得たりと身を交し乍ら片手なぐりに小手を十分に伸ばしましたから、治部右衛門の體を捻るが間に合す、腰の邊に淺傷を負ひ、高く取つてゐた股立は着物の裾を斬られてバラリと下りました、初太刀に後れを取つた彼れは獅子の如く猛り狂ひ、無二無三に側目も觸らず激しく打ちこんで来るに、安兵衛は焦慮つてエーと打を洗んで避けながら、足を拂つて来る早業も、飛び舉つて空を打たせおき、下ろし刀に眞二つと腦天より割つけんとしましたが、治部右衛門も曲者、體を斜に交さんとして左の肩口より乳の上までザクリと割込まれ、ワツト叫び血煙と共にドタリ板敷に墜れて息絶えました。

安兵衛が治部右衛門を袈裟掛に斬つて落した刹那、また一人突出する上野介の近習役柳原平右衛門、同僚の目前に斬り墜されたを悔しく思ひましたか、突然安兵衛の後より斬つて掛らんと致します、其處にゐます人々ソレと云ひさま三四人バラ／＼と進

み、前後左右から鋭い鋒銃を浴せかけられ、目覚しき働き振もなく脆く其の場へ朱に染つた屍を横へて了ふ、寄手の面々は猶ほ斬つて出る者やあらんと、物置を差し覗きましたが口元に人はなく、奥にまだ一個の黒き影の泰然と控へしやうなれど、素より人であるか物であるか知れませんが、最前より人々の爽快の活動に興奮されて居る間十次郎、槍取り直すと其の儘ツカ／＼侵撃し、黒き影を目掛けてグザリ突けば確に手前へがある、その時早くこの時遅し、武林唯七躍りこんで肩先より一刀浴せかけた、兩所の痛手に敵は堪りかねて小刀の柄へ手を掛けたまゝ、一聲ウーンと悲鳴をあげました、十次郎と唯七は左右より負傷の敵に手を掛けて、臺所へ引き出さんとはしますが、負傷ながら中々動きません、兩人が掴んだ手觸にも、着てゐるものは絹布である、聞なれども何となく尋常の敵と思はれん處がございしますので、

「えゝ、出る！出る！」

と、無理無體に引き摺り出して見ますると、果して尋常の者とは異なる處があつて、氣息は奄々として將に絶えんとすれど、まだ息は通つてゐる、精神に轉動して居る模様もございせんから、

「貴殿は何と仰せらるゝ……」

と、言葉を改めて姓名を尋ねましても、更に答へをしない、

「何方でおぢやる……」

と、再び三度問ひ掛けても嘔のごとく、唯だ眼を睨つて怒れるさまが有々と窺はれるばかりであつた、寄合ものは互に顔を見つめて居るうち、誰れいふと無く、

「や、白無垢の小袖を着て居る……」

「お白無垢……」

「尋常のものでおぢやらぬ。」

「年配といひ、白無垢の小袖と云ひ……ハテ怪しうおぢやる。」
と、口々に云ふ。

吉田忠左衛門は悠々と進み出で燭を照して熟視ますと、年頃は既に六十路の坂を越えた老體、身には白無垢の小袖を着なした姿、いかにも尋常人と思はれぬ處が有々と見えて居ります。

「お、各々の仰せ至極なり、白無垢の下着を着るは尋常人でない筈……年配と云ひ風體といひ、上野介殿に相違おぢやるまい。」
と、瞬きもせず見詰めまする、一同言葉を描へ訝しく、

「忠左衛門殿の仰せ、萬に一つでも相違はおぢやらぬ……」
と喜色満面に標引くもございまする、忠左衛門は片膝つき最も慇懃に言葉を改め、
「貴殿は、上野介殿におはさう……此の場合最早是非に及び申さん、尋常に御名乗下

されど

と云つて頭を下げ禮を盡しましたが、相も變らず無言、チツト見詰てゐた忠左衛門は少しも騒ぐ體なく、

「この上は是非に及ばぬ……大夫殿の御思案もおぢやらう、ソレ合圖の笛を……」

と指揮いたせば、ピー／＼と高き一響響きますと、此處にも彼處にもピー／＼とと、曉風に勇ましく力の籠つた小笛の音は立ち、一黨四十有餘人バラ／＼バラ／＼臺所へ駆け集まり、今まで面に棚引く憂愁の雲は曉天の風に吹き拂ひ、ほのぼのと白み渡る東の空のそれに似て、朝日の光を浴んとする光景でござります。

大石内藏助も合圖の笛を聴ますと共に、目指敵の消息の知れぬを憂ひて居る處でございますから、心嬉しく此の場へ臨み、負傷の舉動を一瞥して首肯しましたは、正しく上野介と胸中躍るが如き喜びを色にも出しませんで、忠左衛門よりこの場の次第を

聴き取り、ツカ／＼と負傷の前に跪ぎまゝして、

「拙者は故浅野内匠頭の家來大石内藏助と申すもの……其許様は上野介殿と見奉る、何卒尋常に御名乗下し置かれたうおぢやりまする。」

と、申し入りましたが口を噤んで答へがない、内藏助は再び同じことを繰返して、頭を垂れても更に挨拶をしません。

「御挨拶を下し置かれませぬからは、是非に及ばぬこと、御身體に無禮を加へ申す段、御容赦下されい。」

と、丁寧に断り、

「各方、御老體の古疵お調べなされい。」

と、下知致しまするや、待設けた人々突然負傷者の頭に手をかけて、蠟燭を照して顔の疵を検査しましたが、當時淺傷であつたと見えて是れぞといふ名残りも止めません。

「肩を脱がせよ……」

と、云者のあるより、然らばと小袖を脱がして肌膚を吟味いたしますれば、見紛ふ方なき刀疵の痕歴々として斜に一の字を描いて居りまする。

「お、おぢやりまする、亡君の御手に掛られた御刀の痕……」

と、思はず高く叫びました、その聲に寄り集まります四十有七人の心と心、今更に當時の御無念が思ひ出され、漫に暗涙に咽び歎歎あげるもあつて、大の男が悄然と懐舊の情に打たれて居る。

内藏助は負傷者の側へ膝行寄り、屹度睨んで居りましたが、

「上野介殿、斯くまで確の證據があつても、猶ほ御名乗成されぬか……潔く御名乗

あつて御腹召させられい。」

と、歴々に對する體を重んじて、再三勧めましたが挨拶もしません、素より腹切らう

などゝは仕さうもありません、内蔵助は猛然と身を起し、佩刀に手を掛けるや忽ちス
ラリ抜き放ちて、

「最う是れまでにおちやる、御免！」

と、上野介の胸元を左手に掴みまして、拳も徹れと力をこめて止めの一刀差貫きおこ、
静にその刀を収めて間十次郎を庵ねぎ、

「上野介殿に一番槍を付けましたは貴殿でおちやる、亡君の御志しに適つた僥倖者、
貴殿その首級を揚げられい。」

と、嚴然として言渡しました、衆目みな十次郎の上に注がれ、其幸運を羨まぬものは
ございせんから、十次郎は面目身に餘つてハツト請答へは致したものの、人々の手
前何となく遠慮されて控へますと、内蔵助は再び、

「十次郎殿、速く首級を揚げられい……遠慮も時に寄るものでおちやる。」

と、勵されましたので、十次郎は感涙に咽びながら、

「然らば、御免！」

と、會釋して即時に上野介の首級を討落しまして、三步退つて首級を捧げますれば、
内蔵助は腰に挿した采配を手に採り、三度首を拂ふて戦勝の式を行ひますと、同時に
哄然あげる鬨の聲は天地に響動して隣屋敷にまで響き渡りました。

此の時老人連中から斯ういふ建議が出ました。

「上野介殿に萬々間違ひはおちやらぬが、念の爲め生捕の者に一應示して實否を確め
るも悪くはおちやるまゝ。」

成程と同意するものが多いので、東西兩門内に縛め置いた門番どもを呼出し、

「いかに此の方は當家の御隠居に相違ないか……」

と、首級を見せますと、皆恐るゝ窺ひ見て色を失ひ、

「全く相違おちやりませぬ。」
と、證言しましたので門番どもは縛めを解いて許し、首級は上野介の小袖の片袖を引裂き、武林唯七が之れに包で捧持することに成りました。

八三 裏門前雪の曙光

元禄十四年三月十四日の凶變から年を重ねること二年、月を閲すること二十有二月、日を數ふること五百有餘日を経ました翌年十二月の十四日、月こそ變れ同じ十日の冷光院殿が忌日命日、忠義に凝つた四十七人が當の敵と視ひに視ふた吉良上野介義央を思ひのまゝに討つて果しました事でございませぬから、何れも喜びの色を面に湛へて歡聲沸き、心にかゝる叢雲の霽て眞如の月の影清く、浮世に廣き肩も身も大空わたる雁金の翅もものかは、手の舞ひ足の踏むも覺えぬばかり、此の上は左兵衛殿を

討取らんと、またも邸の内を漁り求めましたが、何れ如何なる處に匿れたか行方は更に知れません。

二年越に臥薪嘗膽の苦を忍んで目指したは上野介一人、今はその首級を首尾よく揚げたからは、子息の左兵衛までを追窮して討ち取るに及ばぬとの、衆議一決いたしましたので、内藏助は豫て示しある引揚げの合圖、ポーン／＼と銅鑼は東雲の空に勇ましく鳴り響きます、ソレ引揚げの銅鑼であると、人々裏門の中に追々集りますれば、堀部安兵衛は懷中から東西兩組の名前書を取り出して、一々姓名を呼びあげ指名點呼を行ひ、死傷を検べましたが、幸ひ四十七人中一人も缺けたるものなく、只だ原惣右衛門が表門より滑り落ちた打撲傷、神崎與五郎と近松勘六が擦過傷あり、横川勘平の薄傷小々負ふばかりで、歩行くに障るほどの者断えて一人もございませぬは、神明も忠烈なる此の壯舉に感應を垂れたまひ、天祐を得たのであらうと互に無事を祝し合

ました。

いざ引揚げと云ふことに成りまして、最後の命令は下りました。

「各方御苦勞ながら今一應邸の内外を廻り、火の元の用心を注意されい。」

人々はまた四方へ散る中に、原惣右衛門、小野寺十内、片岡源五右衛門は北寄の庭を一巡いたし、隣屋敷土屋邸の塀際にまゐりますると、高提灯の火影は漸く淡くなりましたが、詰合の衆は猶ほ肅然として嚴重に警戒するやうに思はれるので、塀越の無禮はお許されいと銘名の姓名を名乗り、

「我れ共只今上野介殿の首級をあげ、是れより退散する處でおぢやる、御屋敷にまで御配慮を相掛け恐れ入り申した、失禮ながら此處より御挨拶を仕つる……」

と、會釋した用意の行届いたには、後世まで人の感服する處でございます、又早水藤左衛門は裏門際より表門に至る長屋を見廻りまして人氣でもありさうな家には、弓矢

を差込んで攪廻し、

「我れ等は今上野介殿を討ち取り立退き申す、主人の討れたを憾みと思ふものは出合ひ出合ひ。」

と、大音に呼はりますが一人も出る者が無い、或は半戸の中に火影のさすを見ると、

「早水藤左衛門満堂一箭まるる。」

と、名乗つては射掛ましたので、いよく敵は恐れを抱いて出る者がございません。斯う成つては満邸寂として人跡なしといふ有様、再び銅鑼はポーンと響き、四十餘人は裏門のうちに集つて、整々と裏門から退去しましたが、此の夜の戦闘は寅の上刻に初まつて下刻に終つたのであるから、今の時間としては午前四時から六時までの二時間でございます。

一黨の人々欣々として裏門を出ますと、夜は明け初めて人の面も臙々と見える、此

處には義士の面々に同情を寄せ蔭ながら援助した大石三平、佐藤條右衛門、堀部九十郎などの人々が待ち受けて祝詞を述べてくれた。討入の當夜百餘人の義に集る浪士が應援いたし、吉良邸の周圍を徘徊したなど書いてある本もございませうが、夫れ等は大嘘で大石三平や堀部彌兵衛の姪の佐藤條右衛門、堀部九十郎、又義士の人々に淺からぬ交情のあつた劍客堀内源太左衛門正春が門下の豪傑二人三人、それとなく吉良の邸外に夜徹しうろ／＼しましたを、斯く大袈裟に言ひなしたのでございませう。

裏門を出ました一味同盟の勇士は暫く休息を與へられる。此の時近松勘六の忠僕甚三郎は人々の壯舉に感じまして、切ては激しい働きの勞を慰めんと殊勝にも思ひ立ち、餅と蜜柑を宵の内に買込み、かねて引揚は裏門と仄に聞咬つたを幸ひ、人々の討て入たを見届けますと直ぐ裏門際に出張つて、様子いかにと氣遣居りますうち、一同は勇しく引揚げて休息いたしましたから、嬉しさの餘り勘六の傍に駆け寄り、雪の凍れ

る往來へ兩手を突き、

「旦那様、先御目出度存じまする。」

「お、甚三か……」

「へー……」

と、云つて見上げる目には涙が一杯、勘六も彼れが誠ある志しの嬉しく、

「甚三、能う來てくれた……我れ等も首尾よう本懐を達し満足いたしました、喜んでくれ

さー」

「それは／＼御目出度存じます、皆様もどんなに御悦びで……」

と、云ひながら傍の風呂敷包を解き、取出した餅と蜜柑を前におき、

「旦那、可笑しな物で失禮ではおぢやりますが……御空腹やまたは渴きのお蔭、何ぞぞ召食つて……」

「おゝ時に取つて氣轉な贈物、辱う存する。」

と、勘六は喜び人々に紹介いたしまする、何れも激しく憚いたあと、随分腹も空てる咽喉は渴いてゐるので、手にく餅や蜜柑を持ち、腹をこしらへ渴きを凌ぎまする時、吉田忠左衛門は甚三郎の側へ寄りまして、

「志のほど、大夫殿初め我等まで過分に存じ申す……」

と、態々會釋されたに甚三郎は意外の面目を施し、ホク／＼喜んで居るうち、上戸の連中は早くも、

「この邊りで一杯祝盃を擧げやうではおぢやらぬか。」

と、云ふと忽ち同意する、氣逸なものは今戸を明けかけてゐる酒屋へ押掛けまして、

「酒をくれい！」

遣つて來た人達は槍などを提げ、全身血に塗れ朱に染つて居りますから、酒さし

人は驚いたの驚かないのではありません、若し酒を賣つたら後難が怖ろしいと思ひ、ワナ／＼慄へながら、

「生憎居酒は市中の御法度におぢやりますれば、何うぞ御免下されませ……」

と、泣かぬばかりに斷ります、斯くと聞いた大高源吾はカラ／＼と笑ひまして、

「我れ／＼は天下の法度さへ破つた者、市中の法度ぐらゐは何事ぞ……心配するならば代物を取らす。」

と、懐中探つて金子二兩の一封を授り出しました、亭主は之を手に取つて見ますと「元祿十五年十二月十四日、浅野内匠頭家來大高源吾忠雄討死、死骸取捨候方へ酒代」と認めてあるので、ます／＼吃驚いたし、

「斯様の大金を……」

と、モヂ／＼して居るうちに最う酒樽は往來へ擔ぎ出される、槍の鐙にてポン／＼と

二つ三つ突けば鏡板は突き破れる、人々は櫓を圍んで甘露くくと舌打ちして、グーツと飲み初めますると、其の意氣は虹のごとく成つて来る、源吾は子葉と號して其の道の好者でございませうから、

日の恩やたちまち摧くあつ氷

と、一句朗吟しますと、富森助右衛門も春帆と號して同じ好者だ、

飛こんで手にもたまらぬ霞哉

と、直ぐ之れに和する、英雄の胸中閑日月ありとは此處のことで、此の場合に猶ほこの風流があるは面白く、源吾は再び、

山を抜く力もをれて松の雪

と遣る、本懐を遂げ重荷を卸したやうにガツカリしたと云ふ意が仄いて居ります、助右衛門も微笑みまして、

寒鳥の身はむしらるゝ行方哉

と遣り返して、ドツト笑ひ興じ、上戸連は好機嫌になつて二時間の奮闘も忘れ、二十餘箇月振で眞に酒の好味を感じました。

彼れ是れいたす間に卯の上刻、只今の午前六時と成りますると、集れの合圖に一同裏門前に集合し列を亂さず、引上後の集合地と定めて置いた兩國回向院へと志しました、一黨の引揚場所を回向院と定めましたは譚のあることで、全體吉良家には米澤十五万石の城主上杉家の後援がある、首尾よく目的は達したものの、今にも上杉家から大衆の押て来るも知れませんが、其の時は上杉勢と思ふさま火花を散らして闘ひ、力が盡くれば其處で見事に討死する覺悟でございましたから、一同は回向院門前へ意氣揚々と引揚げ、此處を足溜りに第二の決戦をいたし、淺野家の名譽を後々まで留めやうといふ計畫に出たので、四十餘人の勇士は今にもあれ大敵押寄せ來たらば、一泡吹かし

て呉れんと腕に撚をかけ、勝誇つたる破竹の意氣を有つて門前に屯集しました。

八四 御手打の上にて

さて同盟の勇士が警戒を加へて防戦の手段を回らしました、當夜の上杉家は何うであつたかと申しますと、豫て赤穂の遺臣が復讐の企てである噂に大守綱憲を始めといひ、家中の面々も心を痛め、重縁の深い關係があるからとは申すものゝ、上野介を白金三光町の邸に庇護れた程でございますから、當夜の討入とても今少し早く日比谷の邸に知れたらば、或は由々しき大事と成つたかも知れません。

兎に角上杉家へ討入の知れたのは餘程時間の経つてからで、吉良へ出入する松坂町の豆腐屋が第一の注進であつたが、此の時はまだ赤穂浪士が黨を組で正々堂々と襲撃をいたしたと迄は、明かに知れて居なかつた、唯吉良の邸に容易ならぬ騒動が起つた

といふ注進で、上杉家の徒士も扱てはと思ひましたが、主君綱憲の夢を破つて申し上げるほど確實でありませぬ、然るに夫れより餘程時過ぎて、吉良家の表門番の足輕丸山清左衛門が氣轉を利かして、重圍を何うしてか潜りぬけ日比谷の邸に第二の注進をいたしました、之れは當人が實地に怖い目に逢つた事を注進したので、最う彈正大弼綱憲の耳に入れない譯には參らんが、太守の耳に入れるまでには夫々の役向にいろいろの相談もある、其の間にまた多少の時間を要しまして、宿直のお側取次役から、『御前、御前、御寝中を恐れ入りますが、本庄のお邸に異變がおちやりました……』と、申し上げますと、常に心を痛めてお在になる吉良父子の身の上、今本庄に異變がとの口上に、忽ち胸にギツクリと来る、

『お、本庄に……』
と、驚かれて勃然と床の上に起きあがられました。

「只今吉良家のお足輕丸山清左衛門と申す者、敵の手配りを潜りぬけ、御注進に参つておちやりまする。」

「赤穂の浪士ども亂入したと申すかッ……」

「御意におちやりまする……彼れの脱出し参るとき、お邸のうちは最早浪士ども散々に浪蕪ないたいておちやる由……最も御兩所様の御舉動は更に存じ申さぬ體でおちやりまする。」

と、言上すると齒咬みを爲し拳を握つて、怒氣滿面に漲り、

「出し抜かれて不覺を取つたるな……」

「未だ御兩所様の御模様は知れ申さねど、誠に心許なき儀に存じられ……御胸中のほど恐れながら推察奉つておちやりまする。」

と、平伏してゐますと第三番目の注進が來たと表方より、取次へ執奏を託して参りまし

た、太守は聲を聞まされ、

「人数の用意いたせ……」

と、自ら下知して置き、まだお側取次の起たぬうち言葉急しく、

「誰れかある、衣服を持って……」

と、自ら難に赴かんとさるゝ舉動でございますから、取次の者は這は一大事である、太守が出馬さるゝやうでは、如何なる椿事の出來せんも知れずと、直ぐ家老千坂兵部の許へ急使を立てました。

兵部は世間の取沙汰に耳を傾けて、始終抜目なく赤穂浪士の舉動に注意いたし、細作を出して細大ともに浪士の動作を知つて居るやうでございますから、當夜の事も豫め心附て居たとの説もあるが、夫れは兵部を豪い者に仕様といふ捏造説かも知れません、併し吉良家の注進に接し、宿直の者から太守へ言上の前、家老の許へ急使を送り

ました時、彼は居間に端然として控へ、寢床なども敷て無く、手焙には炭火がカン／＼とおこつて居た、で急使の來ると直ぐ御殿へ出仕しましたから、再度目の使者はまだ發しません中、兵部は悠々と御殿に出で平生と變るところが少しも見えない、邸内は鼎の沸くごとき混雜、近習小姓の面々は皆おツ取刀で速いを專一と御前に出る、邸内の諸士はソレ戦ひだ奥州武士の腕を見せんと、續々詰め掛けまゐります、太守は既に火事装束に身を固められ、薙刀の鞘を拂つて今や出發せんとする奥殿の大騒ぎ、將に危機一發の場合でございました、兵部は疾く此事あるを心に期して、主家の存亡は實にこの一舉にある、一死は素より厭ふべきにあらず、お家の爲には身を殺して諫め争はねば、上杉家の社禮は當主限り、謙信公以來の名家も斷絶せん、太守が父君の急に赴かんとする情に於ては忍び難きも、お家の大事には代へ難しと、豫て決心いたして居りますから、頗る冷かに頗る沈着いて、隔ての唐紙靜かに開き、ピタリと着座いた

しました、此の體を尻目に掛けられた太守は、兵部の沈着拂ふ態度の心憎く、「父を討たせ其の儘指置いては、武門の恥辱面目が立たぬ、兵部止るな。」と、嚴かに言ひ渡された、兵部は更に應ずる色なくツル／＼と膝行出で、「お言葉を返すは恐れ入りまするが、御前には如何なされておちやるか、何と、赤穂浪人が吉良殿へ推参したとの仰せでおちやるか……這は以ての外の體裁、餘りに龜忽の御振舞でおちやりまする、お心平かに御再慮を煩はせられい……御前は上杉家の御當主、吉良殿の爲めには御家に代へられませぬ、不肖ながら兵部、御當家とは深い因縁でおちやります、まつた先祖よりの言傳へもおちやります、吉良殿へ御助太刀の儀は斷じて罷り成りませぬ、若し強てとの御意におちやらば、兵部がこの首お手打の上、御意のまにまに成されませい。」と、憚るところ無く屹度言ひ放ち、體を斜にして近習の方をハツタと睨み、

「こゝ御家の一大事でおちやるぞ、兵部この處に在る間は一步たりとも動くこと相成らぬ……」

と一喝し泰然自若として大石を据ゑた如く挺でも動きさうもありません、太守の顔色は見る／＼うちに土の如く眼は血走り、己れ兵部いかに重代の家老なりとて、此の場合何の會釋の要らうやと、手を震はし薙刀取り直さんとされたが、道理に責られては手を下すことが出来ぬ、薙刀がらり投げ捨て奥殿に入られた。

夜は全く明離れ上野介は最後を遂げたとの注進はある、猶ほ御殿には太守の意を承けて人数を繰出さんとするもの、兵部の道理に服して御家の大事を楯に取るものの儀論囂々として果しなき最中、上杉家の縁積きである紀伊中納言家より御名代として水野土佐守は駆け付けて参ります、同族の好みある佐竹修理太夫も馳せまゐる、何れも彈正大弼綱憲の心を慰めるため、又一つには上杉家の浮沈の場合を氣遣つて忠告をす

る爲めでございました、是等の人々は何れも兵部と同じ意見で、

「中納言家よりも呉れ／＼とお心添でおちやります、御心中の程は御察し申しまするが、彼れは私事、是れは公事でおちやる、君御一存によつて御名家に瑕瑾つきまするは残念至極、御心平かに御賢慮を回らせられい。」

と、水野土佐守より口上を申し上げる、佐竹修理太夫は兵部を膝近く招き、
「その許の御諫言にて先づ上杉家は安泰に参らう……御胸中のほどお察し申しておちやる。」

と、其の苦忠を汲み同情を表してくるに、兵部は微笑み、
「不肖ながら家老職にある拙者、いかに君侯の仰せとはいへ、お家の一大事には代へ難く、お諫め申しておちやります、幸ひに聰明に渡らせらるゝ御當主、道理を御汲み分け下され、何うやら斯うやら十五萬石を無事に取留めたかのやうに存じまする、

是れと申すも畢竟中納言家様のお言葉といひ、其許様の御取做しに依ること、兵部も執着至極におぢやりまする。」

と、何處までも謙遜して、藩論漸う決定いたしました時は、最う巳の上刻、只今の午前十時でございました。

この時に當つて上杉家にて最早手も足も出すことの出来ない仕誼に立ち至りました、それは公儀よりの使者で、畠山式部大輔が鈞命を御んで乗込んで來た、太守は病氣と披露いたして家老千阪兵部が遙か末座に平伏し、

「彈正大弼病氣におぢやりますれば、家老千阪兵部に、御上意の趣仰せ聞けられませうなら千萬辱なう存じ上げまする。」

式部大輔は首肯きまして、

「上意……吉良上野介不慮の變に逢候に就き、當家中萬一に心得違ひなきやう、屹度

申付候もの也。」

との論しの達しでございます、兵部は平身低頭しながら、

「御上意の趣畏まり奉る。」

とピタリとお請けをしたので、吉良家へ對する上杉家の加勢は出すことが出来なくなり、太守は恨みを吞んで泣き寝入の姿に終りましたが、上杉家が永く東北の雄藩として重きを置かれることを得たは、江戸家老千阪兵部の苦忠に出たのでございます。

八五 橋上有志の見送

同盟の勇士は臥薪嘗膽の艱難辛苦を冒して望みを達し、骨を徹し肉を凍らす朔風を物ともせず、暁天の月光に煌めく白妙の雪を蹂躪りつゝ、勇氣百倍豫ての覺悟、淺野家の名譽を此の世に止め、上杉の大勢を引き受け花々しく討死しやうと、無縁寺なる

回向院の門前に集りましたが、寺では未だ起きて居ません、只だ門前に屯集して敵を待つは策の得たものでない、門内に入つて敵の寄せ入るを邀撃しなければ、味方の不利であるから、先づ坊主を叩き起して門内を暫らく借用せんと、激しくドン／＼ドン門を叩きます、門番は寝惚聲して應と答へたので、

「我れ／＼は浅野家の浪人共でおぢやるが、只今亡主の歸吉良殿を討取つて引揚げ参つたもの、暫時御寺内を借用して休息致したうござる、何卒お許し下し置かれた

S……」

と申し込みましたが、扱て俗物の住僧であつたから、度胸も無ければ義氣もない、お布施を貰ふことばかりより知らぬ圓頂緋衣の浅慮さ、此の申し入れを聴くや、ガタ／＼ガタ／＼身を顫して齒の根も合す、

「開るな、開るな、開けたら大變、何様ことにならうも知れぬ、斷りぢや／＼。」

と、忽ち夜具引被ぎ南無阿彌陀佛／＼、切なき時の佛いぢりに俄瘧病に罹つたやうに顫てゐた、夫れから見ると門番の方が遙か見上たもので、顫聲ながら、

「折角のお頼みであるが、開門は成りませぬ、住持の仰せ付けでござりまする。」

と、言放つて堅く門の門を掛けて了ふたので、血氣に逸る壯者等は、こんな門位何程の事あらん、何うで天下の法度を犯して吉良の邸へ夜討を掛けた我れ／＼、敵き毀して足溜りに、と逸つた連中もありましたが、吉良家にこそ怨みもあれ、回向院には何の恩怨なきところ、赤穂浪士が狼藉したと後々まで言はれては、亡君の御名前にも拘ること、先づ穩便／＼と老人連が慰めましたから、然らば是非に及ばぬ、此の處で敵を待たんと整列して、上杉勢の寄せるを今や遅しと控へて居りました。

凍てたる雪は銀砂を敷いたやうにキラ／＼と朝日に煌めき、炊煙は靄の棚引くやうに濛々として立昇り、商家の店も戸を開け始めたが、敵の寄せ来る舉動は更にござい

ません、大藩の上杉家にも不意の椿事に聞恐したのか、吉良家の家臣は皆腰を抜して追撃の勇氣を殺がれたのか、寄せ来る敵もなきに、徒らに此處に待つは詮なしとあづて、總大将の大石内藏助は、

『この處にて只だ時を移さんより、亡君の御菩提所泉岳寺へ引き揚げ申さん、各自御用意召され……』

と命じました、一同は今にもあれ敵來たれば最後の働きを爲し、亡君の御側へ馳せ参らんと、鬨を討ち取つた餘勇鋭く待ち設けるに、其の甲斐もなきは拍子脱のした心地はするけれども、親しく冷光院殿の靈位に怨敵の首級を捧ぐるは望外の至りであると、喜び勇みて指圖を待ち受けました。

今日はお三日とて、例月大小名が登城して將軍家の御機嫌を伺ふ日でありますから、泉岳寺へ引き揚げますにも、成るだけ大小名の通らない道路を選ばないと、途中に何



様間違ひが起らぬとも限らないことであると、深慮遠謀に富んだ内藏助は、人目に立たぬ路筋をえらびて、退口の整列順を定めました、先づ眞先きには槍を掲げたもの二人、何者にもあれ敵討するならば只だ一突に突伏せても通らん面魂、勇氣凛々四邊を拂つて肅々と進む、それに續いて四五人の面々は上野介の白髪首を護衛の役である、首級は上野介が着て居ました處の白無垢の襦袢の片袖を引きちぎり、それに包みましたを槍の柄に結附け、高く中天に掲げて参るなどは随分大膽至極の振舞で、將軍家の御膝下しかも白晝、大小名の登城日である十二月十五日の朝でございます、此の位の勇氣あり膽力があつて、一心亡君の鬱憤を晴さんと忠義に凝た方々であつたから、素懐を達したので最早一死以て君側に至るを樂しむばかりで、天下に恐るゝ處が無いから此様大膽も爲し得られたのでございませう、其の次ぎを打つのは大石内藏助たゞ一人優然と歩行する状は、流石に黨中の總大將威風堂々として、昨日までも今朝までも胸

宇に曇みし憂愁の雲霧は、朝風に吹き拂ふた如く晴々とした温容を泛べて頼しい、水ぎには負傷または老人を中にして、萬一の事あれば直ぐ應戦の出来る備へを立て、進み、行く／＼途中で駕を備ふて老人や負傷者を勞りました、扱てその殿となつて護衛の任に當つたは、磯貝十郎左衛門正久、倉橋傳介武幸等で、路次を回向院前から本庄一ツ目の河岸に出で、それを眞一文字に深川に入つて御船藏後通りを過ぎ、隅田川の流れに沿ふて永代橋に差掛りました時、一人の浪士袴もはかす息も喘ぎ／＼おつ取り刀で一行を追掛けまゐりましたから、素破こそあれ、吉良家の遺臣で耻を知るもの、縦し適はずまでも一太刀報いて斬り死にせん覺悟と見えたり、方々御油斷あるなど、面々は寄らば唯だ一打ちと身構へいたした。

處が、この浪士は吉良家の遺臣でない、一黨の領袖と仰がる、堀部安兵衛武庸と親しい交りのある、一世の鴻儒廣澤細井次郎太夫知愼で、大石内藏内とも昵懇にしました

で、安兵衛と共に命道の大家堀内源太左衛門正春先生の門下でございまして、奥田孫太夫、間十次郎など、も知合の人で、討入の夜即ち十四日の夜に安兵衛の隠れ家に於いて、大石内藏助、先生の堀内源太左衛門、細井廣澤の三人落合ひ、主人の安兵衛と共に四人で別盃を揚げ、廣澤が土産に持つた鶏卵を取つて、安兵衛は意氣昂然、

「御覽なされ、討入りには、先づ此の如く素懷を遂げ申すぢや。」
と、カチリと割て哄然主客笑ひ興じ、奥底なく交際てゐた人でありましたから、安兵衛は早くも聲をかけ、

「お、廣澤先生！」
「やア、堀部氏、目出度おぢやる……大石氏、日頃の御心勞も今日のお喜び、嗚ぞ御満足執着至極に存じ申す……」

「これは／＼態々のお喜び、千萬辱けなう存じ申す、先づ本懷を達したれば、お喜び

殊更に淺野家の舊邸前に出ると、萬感交々胸に迫り来て、今更のやうに懐舊の涙を催
 しまして、是れが今生の見納めと仰ぐ臉に溢れ、忠義に凝たる丈夫の鐵石心も碎ける
 ばかりでしたらう、ではあるが何時までも戀々と此處に居たとて詮のないことであり
 ますから、面々は惜まれる名残を跡に汐留橋にと掛り、芝に足を踏み込みまして、今
 の愛宕町三丁目である其の頃日比谷三丁目裏町に掛つてまゐりました、此處には名高
 い東奥の雄藩で伊達政宗以來武威を揮ふた仙臺侯のお邸がある、當時仙臺侯の辻番所
 と云へば利けたもので、番足輕の威勢も中々鋭い程であつた處だ、一黨は列を紊さず
 堂々と此處へ練り込んで参つたのであるから、只ださへ利かぬ仙臺の辻番所でござい
 ます、當番の足輕は斯くと見るより決して猶豫しない、手にく又又突棒、或ひは六
 尺棒を携へてバラ／＼と一行の前に立塞がり、
 「お止まりなされ！」

と口々に叫びながら、遮二無二押し止めやうとした、其の勢ひは今にも打て掛らんと
 する舉動であります、其の權幕の餘りに横柄であるので、血氣に逸る壯者の面々は、
 グツト小癢に障つて沸然たる色を爲し、ナニ是れ式の番卒ども何をか爲さん、一蹴り
 に蹴散して通るまでと敦圀かゝるを、内藏助は一喝、
 「お鎮静りなさい！」

と制した上、悠々と番卒に向ひまして、

「御不審御尤でおちやるが、吾々どもは故淺野内匠頭の家來、亡主の遺志を達せんが
 爲に、只今吉良上野介殿の御首級を揚げ、菩提院まで引揚げて、公儀の御沙汰を待
 受けやうと致す者でおちやりまする。」

と答へますと、番卒どもは事の意外なのに驚き、且つ一列の面々は何れを見ても立派
 な武士、殊にその首領と仰がれる内藏助の堂々たる威風に打たれて、初めの勢ひ何處

へやらで、互に目と目を見合して挨拶するものがない、内蔵助は重ねて、
 「只今、御意得た如き次第でおちやる、その上、既に大目附仙石殿までは、同僚を以て届け出で、おちやれば、決して御迷惑は相懸け申さぬ、事なく此の儘お通し下さるやう……」

と、最も感慟に申し述べました。

斯く事を分て聽けば、中々容易ならぬ次第だから、番卒等はお通りなさいとも、相成らぬと飽まで遮り止めることも出来ませんから、其の中で稍や分別あるらしき足輕が、突たる棒を伏せまして、

「暫らくお控へ召されい。」

と、云つて御門内へ入る、此内は仕方がありませんから、一同整列して挨拶を待つてゐる、残つてゐる足輕どもは凛々しい一黨の威風に目も放たず、羨ましさうに眺めて居

りました。

前にも申しました通り、朔日十五日は大小名が登城をいたす例日でございますから、途中で其の連中に出會さぬやうに路次の注意はしたが、何しろ大名の邸は彼方此方と散在してゐるので、途中一八にも會ぬと云ふことは出来ません、或ひは駕または騎馬で登城する大小名に遭つた一人や二人でありません、其の度に異形の扮装して一黨の姿を怪しみ、行列を止めて、

「夫れへ通られるは何れの衆で、如何なる譯で左様な扮装をなさるゝぞ！」

と、問はれる事もありましたが、内蔵助は之れに向ひ昨夜の次第を述べると、何れも深く感心して、中には故意と素知らぬ振して過ぎる向もあり、また打てば響くの喻へで、一黨の凛々しい姿を認めると種々と噂が立つ、其のうちに赤穂の浪人が殿様の敵吉良上野介を討つたのだと、誰いふと無くバツと評判になつて、只さへ物見高い江戸、ソレ

今向ふ角を曲つたよ、今に此處に来るのだ、あのマア勇しい姿は何うだなど、此處の辻も彼處の角も見物が押な〜で一杯に詰め掛ける始末でございましたが、仙臺侯の前に来るまでは、支へるものとてなく易々引き揚げ参つたに、最う御菩提所の泉岳寺までは僅かの道程であるに、今此處で喰止められ亡君のお墓へ敵の首級を手向ることが出来なく成りはしまひかと、お互に心で心配して居りました。

さて門内に入りました仙臺侯のお足輕は、狼狽ながら事の次第を上役へ申し上げる、上役もそれは大變一大事だと、早速重役へ具申致しましたから、定めて種々と評議はあつた事でございませうが、一黨の面々は半時以上も差控へて居ります處へ、肩衣を着けた品格の好い一人の武士が出て来る、此の者の挨拶次第でと逸り男の忠義一徹、只だ亡君の靈前に敵の首級を捧げたいばかりに、如何なる棒事の起らうも知れぬ光景は凄く見えましたが、仙臺侯の家臣は實に感慙を極めて一禮を爲し、

「御一擧の趣き只今承はり、御忠義の段深く感じ入つておちやりまする、唯だ公儀の御掟の手前、一通り御停め申した次第、悪からずお許し下されたい、さア疾く〜御通りなされい。」

と、挨拶した、これを聞くと一同吐息をつきまして、内藏助は丁寧に、

「御言葉の段恐れ入ておちやりまする、然らば御免下されい……」
と、答へて無事に通りました、此處で一寸と申し上げて置くことがあるが、講釋や浪花節などでは、仙臺邸で粥を義士に振舞たやうに言ひますが、其様ことは決して無いのだ、何故と云ふなら四十七人の大勢に粥を喰すには、何様に生煮のものを喰すにしても、昔の一時以上今の二時間は掛るぢやアありませんか、此の場合そんな暢氣な事が出来ませうか。

一行は無事に仙臺邸の前を通り過ぎ、會津の邸前に来ると、又此處でも辻番から咎

められて手間が取れたが、仙臺侯のお邸でも只今然かくでおちやつたと述べますと、此處も差支へなくお通り成されいと來たので、邸前を横切つて金杉橋を渡り將監橋に掛りましたが、同盟の一人でございます磯貝十郎左衛門正久の母は、將監橋の近くに住む旗下松平某の長屋にゐる兄内藤萬右衛門の許に養はれて居りました、何事にも情の深い内藏助は急に佇立み、殿して參る十郎左衛門を招き、

「貴殿の御兄上の御住宅は此邊でござつたのう。」

「左様でおちやります。」

「二走り行て母上の御容態をお見舞成されい。」

と、注意をすると、十郎左衛門は厚く禮を述べまして、

「御親切の段千萬忝けなうおちやりまするが、一旦志しを決して參つた上は、最早私親を省みる所ではおちやりませぬ。」

と、判然答へて辭しました。

「折角大夫殿のお情でおちやるから、一寸お暇乞をして來られては如何ぢや……」
と、堀部彌兵衛も口を添へて勧めましたが、

「イヤ、御芳志は厚くお禮を申し上げますが、第一異様の扮装にて、假令小身の御旗下でおちやつても、舍兄の御奉公いたす邸、また老母も居ります邸内へ立入ることは、其御家に對し無禮でもおちやらうし、又第二には縦し暫しなりとも、如何様の變事出で來らざるとも圖り申されず、其の時居合さずしては一期の不覺とも相成り申しますぢや、拙者はこの儘お捨て置き下されい。」

と、斷乎として動かない、其の義理の固いに流石の内藏助も彌兵衛老人も感じて、然らばお心任せにと申しましたので、十郎左衛門はまたも倉橋傳介と相並んで殿の役を全ふ致しました。

將監橋から高輪の泉岳寺へは、最う一息の丁場でございます、同盟四十七人の義士は、吉田忠左衛門と富森助右衛門の二人が大目付仙石伯耆守の邸へ自訴にまゐつた外、一人一個も隊を亂さずに、始終一團となつて整々堂々、主家の香華院泉岳寺へ入りましたは辰の上刻で、只今の午前八時でございます。

八七 焼香の悽絶愴絶

淋漓たる血痕の其處此處に點々と着いた衣裳を着た四十餘人、槍、薙刀、弓、野太刀など引提げ隊を組み、靜々と泉岳寺の門内へ繰込んで参ると、其の後から、幾百人となく大勢が押して参る様子に、寺の僧侶達は吃驚して周章狼狽、只だうろ／＼まごするばかりでございます。

此の時大石内藏助は、呆れ返つてキョト／＼する一人の僧侶に向ひまして

「拙者どもは昨夜、亡君の讐吉良上野介殿の御邸に取掛け、今朝そのお首級を申し受けたに依つて、之れを亡君の御墓前に供へ御尊靈の御遺恨を慰め奉つらんが爲めに此處まで引揚げ参つた者でおぢやるが、決して御當山に迷惑は掛け申さん、唯だ亡君の御尊靈に捧げ了るまで、何うぞ山門を閉めて他人の來るをお防ぎ下されたい、此の儀一同より御住持にお願ひ致す……」

と、申し入れますと、僧侶は顔の色を變て庫裏に駆け込み、方丈へ斯く／＼の次第と告げますと、當時方丈であつた酬山長恩と云ふ和尚は、至つて俗物でございましたから、其の事を聞くとぶる／＼と慄へ上り、

「イヤ其の御分別は憚りながら宜しうございますまい、當山は淺野家御一門の御菩提所であつて見れば、淺野家遺臣の方々が亡君の誓を討ち、冷光院殿の御靈前に御参詣になるをお断り申す法がおぢやりませうか、公儀よりのお咎めもおぢやりますれば、不肖ながら則天何とでも辯解を仕つらう、疾く御承引あるこそ然るべしでおぢやりませう。」

と、意氣天を衝く勢ひで理解して諫めましたので、長恩和尚も澁々、

「それでは宜しきやうに……」

と、許しましたから、則天は直に法衣の襟を掻き直して立ち出で、

「これは、只今承はりますれば、方々の御忠義の段々古今も例も無い事で、亡君の御尊靈も御満足におぢやりませう、山門を閉して外來の人を防ぐ儀、委細承知いたしてござりまする、御心置きなく寛々と御参拜遊ばされませう。」

と慇懃に挨拶いたして、自ら先に立ち一山の衆徒を集め、追々と込み入つて参ります見物を門外に逐ひ出して、ピタリと山門の扉を閉めガチリと門を下ろして了ひますと、雲霞の如く押寄せ来た見物は、門外でワア／＼騒いで居りました。

「さア皆さんお慕の掃除をして、御焼香なさるやうに致さう……」

と、役僧の則知は自ら法衣の袖を巻きあげて甲斐／＼しく支度をするやら、本堂から經机に香炉を載せて持ち來たり、冷光院殿前少府朝散大夫吹毛玄利大居士神儀の御墓前に据ゑました。

内藏助を始めと致し同盟の人々は、その斡旋の勞を謝しましたる上、携へ來ました仇敵の首級を清水に洗ひ清め、銘々にみな手を洗ひ口をすゞぎ、肅々と亡君の墓前に列を爲し、跪坐いたしましたる狀の森嚴さは、筆にも口にも述べやうも無い靈氣が満ち、天地寂として聲を呑み、霧れ渡つた雪空は瑠璃一碧とも申しませうか、紺青を流

したやうな空から朝日の光りを積雪に投げかけ、キラ／＼と煌めいて着明いほどでございませぬ、其の崇厳なる光景、寂寞たる形状が見えました、其の間を縫ふて當山の英物承天則知は、俗物の和尚長恩に代つて一臺の三方に吉良上野介義央の白髪首を載せ、恭しく墓前に捧げて香爐へ香を炷き込みますと、一炷の香煙は鼻々として上り、香氣は清く四邊に響りました。

内藏助はやがて身を起しまして、靜々と亡君の墓前に進みまする様は、その生前に御前に出ると少しも異つた模様もありません、一同は積雪の上に跪づいて身動きもせず片唾を呑んで控へました、内藏助はお墓の階段下にビタリと坐し、恭しく香を炷いて一禮をしましたが、其の儘身を指るやうに膝行ながら階段を一段上に進みますると、懐中から短刀を取り出して頂き、スラリと鞘を拂ひますれば明皎々たる白刃に朝日を映じ、錠子先から四五寸下へかけて焼刃の曇り、これぞ亡君が怨みを呑んで泉下に赴

かれた御名残かと今更に胸迫るを、一振ふつて柄をお墓の方に向け、鋒先を上野介の首級に擬して一禮いたしましたは、改めて申すまでもなく、亡君神靈御身親ら此の年月の尊儀を晴させたまへと、内匠頭が切腹の當時用ひられたる短刀を、其の後お遺物として内藏助に賜りたる物を供へ、さアこれで御存分に遊ばせと云ふの心でございませぬらう。

當時の内藏助の胸中を付度いたしますれば、身は家老職にあつて城代をも勤めながら、お家の凶變を救ふことの出来なかつた不敏を只管お詫びもしましたらう、又四十餘人の面々が家を棄て身を忘れて、君恩の萬分の一に報ひ奉らんとした事を、神靈に告げも致したでございませう、兎に角こゝに列する四十餘人の人々は内藏助の態度の謹嚴にして而も壯重なるに感泣し、暗涙に咽んで涕汗をすゝりまする音が、樹々の梢に響くばかり、寂々寥々としてソツと身體も引締るやうに覺えました、内藏助は暫く

額づきて身動きもしませんでした。が、稍やあつてヌツクと身を起したかと思ひますと、膝行いたし神前の短刀に手を掛けて立ち上り、凝視と上野介の首級を睨み詰めて、凄い勢ひで刀を揮ひ、無言で上野介の首を打ち、続けさま三度まで白髪首を折術ましたは、是れぞ亡君に代つて鬱憤を晴らす痛撃でございました。二度警の頭に刃を加へました後、内蔵助は一步退つて平伏いたし、再び香を炷いて自分の座に復しまするや、一寸と一同に目禮を致しまして、

「間十次郎殿、御焼香を致されい。」

と申しました、此の意外の指圖に十次郎は先輩も澤山あり、殊に弱年でもありませんから、モチ／＼して席を立ち兼ねて居ますので、内蔵助は再び、

「イヤ御遠慮には及ばぬ……其許が怨敵に一番槍を付けられたは亡君の思召しに適合働き、昨夜第一の御手柄でおちやる、いさお進み成されい。」

と云れて、十次郎は此の上もなき名譽と嬉し涙を拂つて第二番の焼香をする。

「二番太刀を打たれた武林唯七殿、御焼香致されよ。」

との指圖に、唯七は雀躍いたして進み出で、

「武林唯七隆重でおちやりまする。」

と、香を捻つて墓前に拜伏して退りますると、夫れから順々に四十餘人が交る／＼焼香を致して引き退るに、冷光院殿の靈位もこの勇ましき赤誠の籠つた忠義の遺臣に参拜に感應されたか、墓碑もゆらく／＼と動いて快く首肯きたまふやうに見えました。

これで焼香を了りましたから、役僧の則知は一同を寺の中堂に請じ、休息をさせる、内蔵助は則天に向ひまして、

「段々の御芳志で、我等の望みを達し有がたく奉ずる、此の上は公儀の御沙汰を待つばかりでおちやるが、尤途中より同志の吉田忠左衛門、富森助右衛門を大目附仙石

伯耆守殿の御邸へ遣はし、昨夜よりの始末を上申させておぢやれば、暫時此處にてお指圖を相待ちたる存するが、何うか此の儀お許し下されたい。」
と、申し入れますと、異議なく承知いたしましたして、方々も御空腹であらうと、白粥と酒を馳走いたしました。

八八 驚天動地の自訴

赤穂の藩中で四方に使用して君命を辱しめざるものは、年配者では吉田忠左衛門兼亮で、此度の一擧でも副頭領と仰がれ、大石内蔵助が第一の相談相手でございます、また壯者の側では富森助右衛門正因で、言語は明晰して意氣明瞭、如何なる事の沸き起るとも、ピクともせず、埒を明けて参る男でございました、昨夜吉良邸へ仕掛ます時は、若しも不幸にして望みを遂さる曠天には邸に火を放ち、一同切腹して猛火の中

に屍を灰にせんと盟ひ、また幸ひに警の首級を擧げたる時は、公儀に訴へ出て御裁許を受けん申合せでございましたから、泉岳寺へ引揚げの途中、愛宕下から一同に別れた、吉田忠左衛門は正使富森助右衛門は副使となり、總大將大石内蔵助の命を帯び、二勇士は勇ましい姿の儘で、大目附仙石伯耆守久尙のお役邸へ乗り込みました。
大目附の役宅ではまだ朝が早いので、玄關に詰合す家臣も無く、下廻の役人が御用机などを配置して居る處へ、異様の二人、太平の世に鞘を拂つた槍を門前に立掛けおき、臆する體なく大玄關より案内を請ひましたので、仙石家の家臣は呆氣に取られて居りますと、
「我々は赤穂の浪人吉田忠左衛門、富森助右衛門と申す者でおぢやるが、昨夜同僚四十餘名と吉良邸に討入り、亡君の警上野介殿のお首級を申し受け、只今高輪泉岳寺に引揚げましておぢやりまする、就ては公儀に對し奉つりては、何とも恐れ入つ

たる次第でおちやりますれば、御指圖を仰がん爲め、兩人參上仕つておちやる、委細の儀は伯耆守殿へ拜謁の上申し述るでおちやらう、宜しくお取次下されたい。」

と、最も丁寧立板に水を流す如く淀みなく述べましたので、仙石家の家臣は、また更に驚きを増し、周章の體で倉皇奥に駆けこみ、

「御重役様、大變事出来致しておちやりまする。」

「ハテ倉皇しい、何事でおちやるの。」

「何事處の騒ぎでおちやりませぬ、赤穂浪士の面々が、吉良殿を討取てお邸に訴へ出ました。」

「それは捨置かれぬ、口上の趣きは可しく、早速御前に申し上げて……」

と、重役も狼狽の光景で仙石侯の御前に仕候いたしましたして、斯くくと吉田、富森、兩士の口上を申し上げ、如何取計らひませうやと伺ひますると、仙石侯は暫く思案され

「直々會ひ申さう、廣間へ通せ……粗相な取扱ひは致すな。」

とのお言葉でありますから、家臣は兩士を玄關に迎へ、直々お會の旨を通達いたしました、忠左衛門も助右衛門も其處で兩刀を脱して仙石家の家臣に渡し、案内されて廣間に通りました。

やがて伯耆守は繼上下にて出座になると、兩士は平身低頭して敬ひ、忠左衛門より亡君の舊慣を散ぜんが爲めに吉良家へ仕掛ましたる次第を詳しく述べ、一寸一息繼ぎ、

「最早本懐を達しましたる上は、一同腹切り相果て申すべきでおちやりまするが、お膝下にて高家歴々の方を私に討取つたる段、公儀に對し奉り恐れ入つたる次第におちやりますれば、一同亡君の墓前に引揚げ、御裁許を仰ぎ奉らん爲に、自訴し出ましておちやりまする、委細この口上書にて御賢察を願ひ上げまする。」

と、連名の上書を差出しました、伯耆守は書面を手に取りあげて見ますと、趣意も明白で陳述も判然して居りますから、胸中十二分に感服されまして、兩士を御覽になり、「人数は是れ限りであるか。」

「御意の通りでおちやります。」

「この人々は皆泉岳寺に聚り居らるゝか。」

「御意におちやります、一人も離散せず、相控へて居ります。」

「それは神妙のことであるの、是れより登城に及び逐一言上するぞよ、其の間寛々と休息されい。」

と、既に其の席を立たうとされる時、忠左衛門は重ねて、

「お手厚き御意有難い仕合に存じます、只一同の者御沙汰を待ち詫び居らうと存じます、兩名の内一名だけ泉岳寺までお返し下されたく存じます……」

「イヤ未だ訊ねる事もある、只今登城を急ぐに依て、予が退出まで控へられん。」と、言ひながら、家臣をお呼びになりました、

「兩人とも嘸ぞ空腹であらう、湯漬を参れ！」

と、命じになつて、急ぎ登城される、家臣は交るゝ出で、兩士を歎待して居りました。扱て仙石伯耆守は登城に成つて申達されましたから、泰平に馴れた公儀は大騒ぎで、老中安部豊後守正武、土屋相模守正直、稻葉丹後守正通を始め若年寄の面々も追々登城になる、又社奉行阿部飛騨守は泉岳寺の住職からの訴へで登城するなど混雑を極めます、其の中で伯耆守は役柄として御目附阿部式部、杉田五左衛門に御徒目附四人、御小人目附五人を添へて吉良邸へ遣はされ、現場の檢按をされました。

吉良邸の様子は散々で埒口もありません、左兵衛義周は頼に三寸背後に七寸の疵を受けたとあつて、大袈裟に白布を巻き立て、居りますが怪しく、其の他家來共の死傷

はと云へば、左の如く調書は差上げになりました。

祐筆	同	同	同	同	同	中小姓	同	同	同	用
鈴木元右衛門	左右田源八郎	小堀源五郎	新見彌七郎	齋藤清左衛門	清水一學	大須賀治部右衛門	須藤與右衛門	鳥居利右衛門	小林平八郎	南書院前
三十一歳	四十歳	二十二歳	四十歳	四十歳	二十三歳	三十歳	未詳	四十歳	未詳	南書院前
小室出口	同	同	同	玄關	同	臺所	南書院次	座敷庭	南書院前	南書院前

取次	用人	同	家老	仲	足輕	同	坊主	役人	同
齋藤十郎兵衛	宮石所左衛門	岩瀬舎人	松原多仲	何	森半左衛門	牧野春齋	鈴木木松竹	神原平右衛門	笠原長太郎
二十五歳	五十歳	未詳	四十歳	未詳	未詳	未詳	五十歳	二十五歳	二十五歳
深手槍三	中手三ヶ所	かすり手	中手二ヶ所	馬屋前	小玄關	臺所	書院次	書院次	書院次

都合十六人討死

昨十四日夜八ツ半過上野介並に拙者罷在候處へ、淺野内匠頭家來と名乗大勢
 火事装束の體に相見え押込申候、表長屋の方は二個所に梯子を掛け、裏門は打破
 大勢亂入致其上弓、箭、槍、長刀など持參、所々より切込申候、家來共防候得
 共、彼共は兵具に身を固め參候哉、此方家來死人手負多有之、亂入候者へは
 手を負せ候ばかりにて、討留不申候、拙者方へ切込申候に付、當番之家來傍
 に臥居候者共之を防ぎ、拙者も薙刀にて防ぎ申候處、二箇所手を負、眼に血
 入り氣逆く罷成、暫く有て正氣付、上野介儀無二心許存、居間へ罷越見申候へば
 最早討れ申候、其後狼藉之者共引取居不申候。

十二月十五日

吉良左兵衛

八九 壯重な途中警護

吉良家に向つた御目附の一行はお取調べを終つて歸る、檢按書も書上げになりまし
 たので、老中は打揃ふて時の將軍家綱吉公の御前に出で、昨夜からの顛末を詳しく言
 上申しますると、綱吉公は親しく聴かせられた上、一黨が復讐をした由緒を續述した
 口上書をも御覽になつて、深く感じられたと見えまして。

『内匠の遺臣どもは、長い間嘸ぞ辛酸を嘗たであらうのう。』
 と、同情のお言葉がありましたから、老中の一人は恐るゝ、
 『御意の通り大分辛苦を致したやうにおぢやりまする、兎に角珍らしい忠義の者共で
 十分御詮議の上にて御仕置然るべきやうに憚りながら存じまするで、一時大名中
 お預けの儀如何に思召しまするや、御賢慮の程伺ひ奉りまする。』
 と、申し上げると、將軍家も首肯かれて、
 『好きに計らへ！』

この御沙汰が出たので、老中は協議の上にて四十餘人を大名四家へお預けと決定いたしました、而して老中より肥後熊本の城主細川越中守綱利へ十七人、伊豫松山の城主久松隠岐守定直へ十人、長門長府の城主毛利甲斐守綱元へ十人、三河岡崎の城主水野監物忠之へ十人をお預けに成るにつき、泉岳寺に於てそれ／＼受取るやうとの口達が出ました、

又一方には御目付水野小左衛門、鈴木源五右衛門に御徒目附、御小人目付などを引連れて泉岳寺に至り、一同を仙石伯耆守役宅へ護送するやうにとの命令が下りました、又てその御沙汰を被つた兩御目付は頭を鳩め、是れは大變のお役目に當つたものである、淺野家浪人が吉良の邸に仕掛けて上野介を討取つた事は、最早市中に隠れない風説であるから、上杉家は武門の家筋ぢや、萬一にも途中で襲ひ撃ぬとも限らないその時御上意の趣きは説諭もいたさうが、承知せぬ時は夫れまで浪人等と共に花々し

く戦ふて討死をなし、公儀の御面目を辱しめぬやうせねば相成らぬぢや、と胸を固ためましたから、其の準備に取懸つて戦場に臨むやうな騒ぎでございます。

そこで幕府の役人どもも若し左様の騒動になつては山々しき大事である、是れは却つて四十餘人の者に自身で仙石邸へ出頭させ、中渡しをする方が無事ならんと、急に評議が變つて兩御目附は、仙石邸へ差遣はされることに成りまして、泉岳寺へは御徒目附石川彌一右衛門、市野新八郎、松永小八郎の三人が單に出頭せよとの知らせまでに馳せ向ひました、此の時最う水野家と久松家のお預人受取りの人数は、泉岳寺へと向つて繰出して居る始末でございます。

浪士をお預になる四家中で細川家は五十四萬石の大々名でもあり、越中守が殿中で其の御沙汰を受けるや、家の名譽と歡ばれますと同時に、直ぐ胸に浮んで参つたは、上杉家の途中襲撃でございます、這は容易ならぬ重任である、上杉勢如何に手段を廻

らすとも、細川の武名を落しては相成らん、自ら出馬してお預人を受取らうとまで申し出でらるゝ程でありましたが、太守の出馬とあつては餘りに仰々しき譯となるからとて、家老三宅藤兵衛を總大將として、鉢田軍之助、堀内平八、平野九郎右衛門など云ふ一番で格式も高く、思慮も深い屈指の士が騎馬を打たせ、駕十七挺の外に用意の駕五挺を備へ、上下七百五十餘人の同勢、愛宕下の仙石邸に馳付けまわりました。

また久松家でも御奉書の到着するや、直ぐ人数を整へ、是れも上杉家の舉動を氣遣ひましたから、一邸の精銳を盡くし番頭奥平次郎太夫、佃九兵衛が應を振り、十三挺の駕を擁して逸早くも泉岳寺へと繰込みました、同勢は三百餘人と數へられました。

久松家の一隊の繰込んで参ると、既に泉岳寺の山門前の廣場に、水野家の一手山田大右衛門、山内九郎右衛門が優りに優つた精兵上下二百餘人にて陣を敷き、何人たりとも一步も足を容れさせじと控へる様に、五萬石の小藩ながら侮りがたく見えまし

た、最久松家の一隊が屯集する處がないので、軍奉行で松山藩中の傑物波賀清太夫朝榮は、水野勢の中に騎込み、蘇張の辯を振つて、漸く場所の半分を譲り受けて屯しました。

また毛利家にも御多分には洩れずで、田代要人、原田將監が二百餘人を引率れて泉岳寺へ向はんとする時、第二の御奉書が到着したので、之れは細川家と同じく直ぐに仙石邸の方へ馳せ参りました。

さて泉岳寺に在つて御沙汰を待暮して居りました四十餘人の面々は、其の日の酉の下刻と申しますから只今の午後七時、御徒目付から大目附仙石伯耆守役宅へ即刻罷り出るやうにとの口達を受けたので、出發の支度に取懸りました、折柄の大雨でござい

ますから、闇に乗じて上杉家から如何なる襲撃を受けやうも知れぬと云ふ懸念もある殊に申立こそ誠に恭順でございますが、將軍家のお膝下で大袈裟に劔戟を弄して憚

らぬ大膽者だ、途中不覺を取るやうなことがあつては一生の名折れと、何れも着込の上帯を固く締め、兜頭巾の緒を確り結び、槍薙刀は鞘を拂ひ、弓手は鞆を佩き半弓を手挟み、篠衝く雨を犯して高輪海岸を三田通り、西久保より愛宕下の仙石邸へと押し出しました。

仙石邸の門前には四家の勢、其の衆一千五百餘人、家々の定紋打つた高張提灯を掲げ騎馬提灯幾百となく點し連ねて大路を埋める中を、悠々と通り抜けて門内に入り、玄關より廣間に案内されて差控へますれば、やがて大目附仙石伯耆守は出座になり、御詮議中四家へお預になる由口達された後に、一黨の連名に在る寺坂吉右衛門の居らぬは如何と問はれましたので、内藏助は直さま、

「彼の者は一同と吉良殿御屋敷へ討入り、今朝泉岳寺へ引揚まるまでは居りましたが、其後姿が相見え申さぬ、自體軽い身分の者なれば詮方おちやりませぬ。」

と答へると、伯耆守は首肯かれた儘で、重ねて取調べも無く済みました。

夜は次第に更けて亥の上刻今の十一時ごろになつて、第一に細川家の受取人を呼出されまして、十七人をお預になる其の面々は、大石内藏助、吉田忠左衛門、原惣右衛門、片岡源五右衛門、間瀬久太夫、小野寺十内、間喜兵衛、磯貝十郎左衛門、堀部彌兵衛、近松勘六、富森助右衛門、潮田又之丞、早水藤左衛門、赤埴源藏、奥田孫太夫、大田五郎左衛門、大石瀨左衛門でございましたが、引取の一行は浪士を乗せた駕籠一挺毎に、高張提灯二張、これを眞先にして次に箱提灯二つ、次に騎馬の士二人、次に駕籠、次に使番の侍若くは小姓衆一人と云ふ割で、其の他は護衛の足輕大勢でござ

います。
第二に仙石邸を出ましたは久松家の一手でございまして、大石主税、堀部安兵衛、中村勘助、菅谷半之丞、不破數右衛門、千馬三郎兵衛、木村岡右衛門、岡野金右衛門

貝賀彌左衛門、大高源吾の十人。

第三番目に出ましたのは毛利家の一手で岡島八十右衛門、吉田澤右衛門、武林唯七、倉橋傳助、村松喜兵衛、杉野十平次、勝田新左衛門、前原伊助、間新六、小野寺幸右衛門の十人でございます。

最後に出ましたは、間十次郎、奥田貞右衛門、矢頭右衛門七、村松三太夫、間瀬孫九郎、萱野和助、神崎與五郎、横川勘平、三村次郎左衛門の九人、これは水野家にお預になる面々でございます。

護送の行列は家々に依つて多少の相違はございましたが、何れも同情がある上に、公儀でする犯罪者の如き取扱ひをしないのですから、一同に對する取扱ひは寛大なもので、殊に細川侯の如きは此のお預を家の名譽とさへ叫ばれた程で、その待遇は恰も珍客に對するやうな始末でございました。

九〇 萬世不朽の譽れ

御預人に對します四家のお取扱ひは、款待を盡しましたが、細川家は殊に武張た家柄であり、太守も自ら一同を迎へられた程の同情もあれば敬意も拂はれました事で就中に優遇されたが、細川家とは釣合の取れぬ小藩ながら、水野家も義士に對して頗る款待を極め評判が至極宜しかつた、それで當時「細川や水野流れは清けれど只大かい(甲斐)のおき(隠岐)ぞ濁れる」との落首が出来ました。

此様風で、誰でも忠烈の士は殺したくないから、民間では素よりの事でございますが、幕府の役人中でも歴々の人々が御赦免にさせたい、斯かる珍しい忠義の者をむさむさ腹切らすは惜いとは一般の人情でございますから、四十餘人の人々は特典に依て御赦免になる、公方様にも其の思召して居らせられるのだと、世間の風評は高くなつて

来たので、義士貞負のものは皆自分の事のやうに雀躍して喜びました。
私情の爲に法を曲ると云ふことは許さぬ、彼れは可哀さうだ是れは氣の毒だと法令
を無視いたしては、天下を治めることは出来なくなりまから、當路の役人共も涙を
吞んで四十餘人のお仕置を決定して、將軍家へ言上して裁許を仰ぎました、將軍綱吉
公も大法の定むる處、如何ともする事が出来ませんので、是非なく按に從はれる、此
の上は然るべき處より命乞の哀訴が無ければ、最う何うする事も成らぬ始末でござい
ました、只一縷の望みは大奥からも日光御門主公辨法親王の法衣のお袖に縫られてゐ
る、此方の命乞があれば赦免の道もつくとのお思召しであつたので、二月の朔日御門主
が年始の御禮として御登城になりました時、綱吉公は四方山のお話の序心あり氣に
「イヤ政治を執り行ふ身ほど世に心苦しい事はおちやらぬ、内匠が家來の事どもは追
々お聞及びもおちやりませうが、其の忠烈義心は感すべきもので、何とかして助命

し遣らんと存するも、政道と並び行はれぬには……」
と、法親王のお口より助命の御沙汰が出るやうにとの謎をお掛けになつた、けれども
法親王は覺らざる狀にて、

「御苦心のほど御察し申し入る……」

と、御挨拶あつたのみで退出になる、綱吉公も本意なく思召して嘆息されました。

此のことが知れると直ぐ大奥から日光御門主の御旅館上野東叡山寛永寺にお使者が
立ちて、只管命乞の御沙汰を願はしいとお依頼になりました、御門主もホツと太息を
お吐きに成り、

「自分は將軍家より親く命乞の謎を承はつた時ほどの苦しみは今日まで覺え居らぬ
將軍家の御胸中をお察し申しては法體の身で、忠臣義士を法衣の袖に庇護度は山々
でござつたが、四十餘人の中には血氣の定まらぬ壯年もあり、後日萬一の事あつて

可憐な汚さぬとも限らぬ、此處は彌陀の大慈悲と仰せられた處と、涙を吞で王法に從ふが國の爲め人の爲めだと目を睡り申しておぢやるよ。」
と、使者へのお答へはなくて、餘所ながらの話し、使者の人は立歸つて有の儘を復命した、これにて將軍家の思召しも決し、二月四日淺野家の浪士に死を賜ふことに成りました。

そこで四家へはそれ／＼御内沙汰があつたから、當日差支への無いやうに準備を整へて待て居りますと、細川家へは御目附荒木十右衛門、御使番久永内記、久松家へは御目付杉田五左衛門、御使番駒木根長三郎、毛利家へは御目付鈴木次郎左衛門、御使番齋藤治左衛門、水野家へは御目付久留十左衛門、御使番赤井平右衛門が、御徒目付御小人目付、御使衆などを從へて出張になる、何れもお預の面々を呼出しに成りまして、

「淺野内匠頭儀勅使御馳走之御用被三仰付置候處、時節柄殿中をも不憚不届之仕方に付、吉良上野介儀は無三御構ニ被ニ差置候處、主人之仇を報候と申立、内匠頭家來四十六人致ニ徒黨ニ上野介宅へ押込、飛道具杯持參、上野介を討候始末、不恐ニ公儀候段重々不届に候、依之切腹申付者也」

との上意を宣告されました、其の後吉良左兵衛義周は、父を討れた節不届につき知行召上げられ、諏訪安藝守へお預になつたと、一黨の面々に告げられましたから、何れも笑みを含んで双に伏し、萬世不朽の美名を遺しました。

四十六人が生前の望みでもありませんから、四家では打合せの上元祿十六年二月四日の夕暮、遺骸は泉岳寺に送り本堂の縁側に白棺を据ゑて大讀經、大引導があつて、冷光院殿の墓側に埋葬されました、其の順序は、

忠誠院 双空淨劍居士

大石内藏助良雄

双仲光劍信士
双鋒毛劍信士
双勘要劍信士
双譽道劍信士
双以申劍信士
双泉如劍信士
双周求劍信士
双毛知劍信士
双隨露劍信士
双勇相劍信士
双聽空劍信士

吉田 忠左衛門兼亮
原惣右衛門元辰
片岡源五右衛門高房
間瀬久太夫正明
小野寺十内秀和
間喜兵衛光延
磯貝十郎左衛門正久
堀部彌兵衛金丸
近松勘六行重
富森助右衛門正因
潮田又之丞高教

双破了劍信士
双廣忠劍信士
双察周劍信士
双法參劍信士
双寬德劍信士
双上樹劍信士
双雲輝劍信士
双露白劍信士
双水流劍信士
双觀祖劍信士
双通普劍信士

早水藤左衛門滿堯
赤埴源藏重賢
奥田孫太夫重盛
矢田五郎右衛門則武
大石瀬左衛門信清
大石主税良金
堀部安兵衛武庸
中村勘助正辰
菅谷半之丞正利
不破數右衛門正種
木村岡右衛門貞行

双道五劍信士
双回逸劍信士
双電石劍信士
双無一劍信士
双袖拂劍信士
双當掛劍信士
双性春劍信士
双鍛鍊劍信士
双模唯劍信士
双有梅劍信士
双可仁劍信士

千馬三郎兵衛光忠
岡野金右衛門包秀
貝賀彌左衛門友信
大高原吾忠雄
岡島八十右衛門常樹
吉田澤右衛門兼貞
武林唯七隆重
倉橋傳介武幸
間新六光風
村松喜兵衛秀直
杉野十平次次房

双量霞劍信士
双補天劍信士
双風颯劍信士
双澤藏劍信士
双湫跳劍信士
双擲振劍信士
双清元劍信士
双太及劍信士
双響機劍信士
双常水劍信士
双珊瑚劍信士

勝田新左衛門武堯
前原伊助宗房
小野寺幸右衛門秀富
間十次郎光興
奥田貞右衛門行高
矢頭右衛門七教兼
村松三太夫高直
間瀬孫九郎正辰
菅野和助常成
横川勘平宗利
三村次郎右衛門包常

双利教劍信士

神崎與五郎則休

以上の如く内蔵助を第一として四家お預けの順序に依りまして、亡君冷光院殿の方を上とし秩序整然と建てられました、それから間十次郎の墓の東隣に「遂道退身信士」と云ふ一基がありますが、これは特種の使命を帯びて泉岳寺から身を隠した寺坂吉右衛門信行の墓を、後に好事者が建てたのである、處で、今一基「双道喜劍信士」と云ふのが大高源吾の次にもあるが、世に之を薩州の劍客喜劍の墓だと言傳へて居ますけれど、實は薩州の僧侶岱潤といふ者が吉右衛門の爲めに建てたのだと申します、で、吉右衛門の墓は二基あつて變な譯となりました、是等の事を詳しく述べるに長くなるから、先づ此位にして置ませう。

赤穂浪士壯烈の一擧は、泰平の緒に就き、人々怠氣を催しかけた處へ、爆烈彈を投げつけた程に士氣を鼓舞し、天下の耳目を聳動させた一大快事でございました、管に

赤穂義士 終

快事と申すばかりで無く、我が固有の日本魂の神髓を發揮したもので、爛漫と咲き出した我が武士道の花は、雨も風も奪ひ去ることが出来ず、永久に朽ぬ馨りを傳へるに至り、其の美しい名を四十餘基に遺し、今に至るも香煙裊々として盡ぬも故ある哉でございます。

短慮の十戒

- 一には後悔あり
- 二には物くるはし
- 三には其の愚あらはる
- 四には智ある人親します
- 五には他人に仇の思をなす
- 六には器を減す
- 七には病を生ず
- 八には争ひ多し
- 九には苦勞多し
- 十には衆惡を發す

昭和九年四月十五日印

昭和九年四月二十日改裝發行

赤穂義士 奥附

定價金貳圓

不許複製

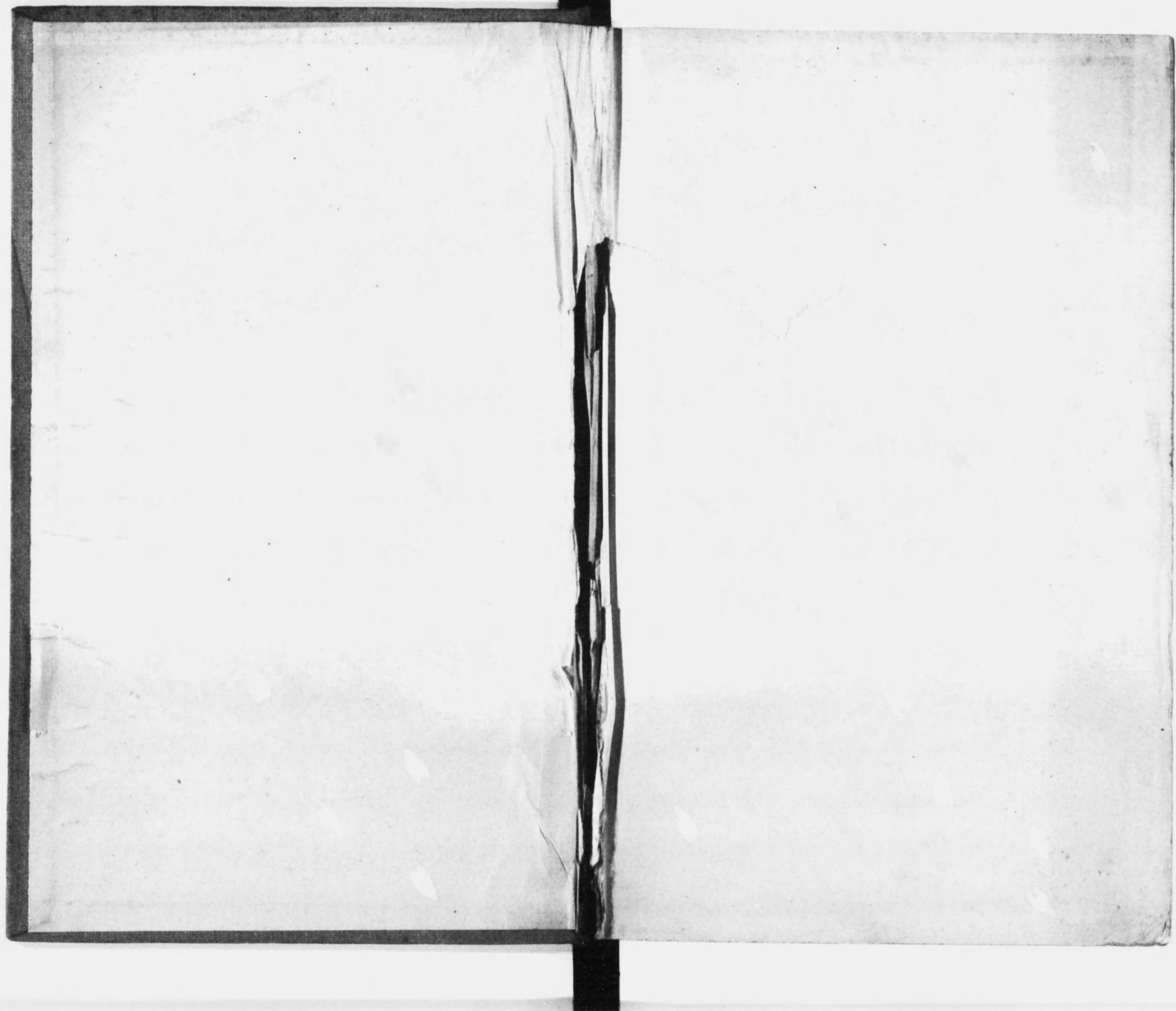


著者 伊藤仁太郎
 發行者 松浦一郎
 印刷者 村松治助

發行所

大阪市東區博勞町二丁目二番
掘替口座穴阪三四一七五番

巧人社



終

